
DUAL

徳次郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

DUAL

【コード】

N4117B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

解離性同一性障害 多重人格性。孤独の中で生きる彼女の傷に気付くものはいなかった。十三歳の時から父親に性的虐待を受けてきた由衣島乃亜ゆいしまのあは、十七歳になったある日、突然自由の身になった。父親が死んだのだ。しかし、彼女には心の傷と共に消えないものがあつた。そして乃亜はある日、見覚えの無い女性から亜矢乃と言う名前で呼び止められるのだった。

【第1話】（前書き）

少々過激な語句がはいっておりますが、作品の性質上ご了承ください。出来るだけ自然に表現しております。

DUAL

【第1話】

風はまだ時折冷たい冬の名残を感じさせていたが、公園の端に植えられた梅の木は白い花が満開で、確かに近づく春の香を漂わせていた。

麗かに漂う雲は、陽の光を浴びて真っ白に輝き、まるでその白さが地上を照らしているようで、彼方に聳える秩父の山並がくつきりと見えた。

西武池袋線入間駅。岩山のような公衆トイレが在る西口のロータリーを抜けて、ケヤキの並木通りの坂を登って行くと大きな交差点がある。

真っ直ぐ行くとDr何とかという、有名な発明家の研究所があるが、左に行くとも直ぐに稲荷山公園の自衛隊基地があり、右へ進むと立派な建物の市役所がある。

その市役所の向かい側の大きなマンション。12階立ての一階部分はテナントになっておりコンビニや信用金庫が入っているが、路上に面していない内側の物件はここ数年何も入った事がない。

だから、一階部分のエレベーター通路周辺は何時も閑散として、子供の影さへ見る事は少ない。管理人室と書かれた部屋には、誰の姿も無く、時折よれよれの爺さんが中に座っていたりする。

昨年この屋上から、中央の吹き抜け通路部分に飛び降り自殺した人がいるが、翌朝まで誰にも発見されずに通路に転がったままだった。

そのマンションの十階の一室、薄暗いリビングで結衣島乃亜は一人佇んでいた。

目の前にあるのは土色に変わり果て、横たわる父親の姿。

そこは、地獄でも天国でもなく、テレビと安いソファが置かれた6畳ほどのありふれたリビングだ。

タバコのヤニであちこちが茶色く変色したカーテンの隙間から、陽の光が差し込んでいた。

その中央に倒れた父親の顔は、眠りの中で悪夢にうなされているような苦悶に満ちた表情を浮かべたまま硬くなっている。

しかし、乃亜にはこれから始まる自由を意味するその光景が、まるで大聖堂の天井画のように見えるのだった。

そう、昨日までこの家はこの土色に変わった男のせいで、乃亜にとっては在る意味地獄よりもおぞましい空間だったのだから。

母親は、彼女が十二歳の時にある日突然家を出て行った。その翌年から父親の虐待は始まった。

誰にも言えない。誰も助けてはくれなかった。

一階テナントのコンビニ店主は、乃亜が買物に行くと、子供は誰もが幸せいっぱいであると思っているかのように優しい笑みをくれた。

でもそれは、彼女にとって何の助けにもならなかった。

誰も知らないごく平凡な日常の中で、乃亜が向かえる夜は絶望と恥辱に満ちていた。

乃亜は土色の骸の前に電話をとり、警察へ連絡した。

その声は、思わず笑みが零れそうなのを抑える為に震えていた。

自転車に乗って目の前の国道を渡り、市役所の向かい側に在る市民プールを横切って県道に出ると、市民会館の前に出る。その道を真っ直ぐ走り、突き当りを右へ曲がるとゆるい下り坂が続いて駅前から伸びる寂れ果てた商店街の外れに出る。

そのT字路を左へ走ると直ぐに国道16号線がある。広めの歩道に沿って風を切って走り、ニッサンディーラーの前の横断歩道を渡ってファミレスの前を通り抜け、路地をしばらく行くと、右手の民家の先に学校が見えてくる。

父親の葬儀が終わって間もない頃、春休みに入ったと言うのに、乃亜は今後の事を報告する為に学校へ来た。

父親の葬儀は、近くの葬儀会館を借りて、慎ましく行われた。乃亜は何とか無心を保って喪主を務めた。

お通夜の焼香に来た担任教師は、落ち着いたら一度学校へ来るようにと言ったのだ。

落ち着くも何もない。乃亜は初七日が終わると、直ぐに学校へ向かった。

正門から入って直ぐの駐輪場に自転車を止めると、校庭の隅を横切って校舎へ向かう。

運動部が盛んなわけでもないこの学校の春休みの校庭は、閑散として人影は無かった。

「じゃあ、引越して一人で住むの？」

担任教師の笹沢静果が言った。

「はい。伯父が近くにいますので」

乃亜は嘘を言った。親戚なんてほとんどいない。葬儀を出してくれた僅かな親戚も、ほとんど顔の知らない人たちだった。

誰が何処に住んでいるかも訊かなかつたし、向こうもこの先乃亜がどうするのか訊く者は無かった。

きつとみんな、これ以上関わりたくないんだ…… 乃亜は葬儀の全てが終わって、みんなが帰宅する際に、お礼をいいながらそう思った。

「そう。お金は大丈夫なの」

「はい。当分は大丈夫です」

お金が無いと言ったら、あんたがあたしの生活費を出してくれるわけでもあるまいし……

生命保険のお金が下りるし、アルバイトもしている。なんとかやっていけるだろう。

引越先は決まっていると言う乃亜に、担任の笹沢は

「じゃあ、引越しが済んだら連絡ちょうだいね」

そう言つて慈悲の笑みを見せた。

乃亜は校舎を出ると、堪えていたものが一気に湧き出して
「バツカみたい」

そして、乾いた風に吹かれながら、駐輪場まで闊歩した。

静かに流れる雲が頭上を通り過ぎると、眩しい陽射しが降り注いでいた。

【第2話】

乃亜の引っ越しは直ぐに行われた。あの家にはもう一秒足りとも居たくなかった。

新居は市民会館の近くに小さなアパートを借りた。ほんの少しだけ学校が近くなる。

保証人がいない為、今まで住んでいたマンションの管理不動産に相談した所、とりあえず敷金礼金の他に一年分の家賃を前払いする事で解決できた。

父親の知り合いである不動産屋の社長は、他に困った事があつたら相談に乗ると言ってくれた。おそらくあの男の知り合いの中では一番マシな人間だろうと、乃亜は思っている。

自分の荷物だけ持って、父親のものは全て廃棄処分した。

あの男を感じるものは、写真一枚だつて新居には持ち込みたくなかった。どうせ仏壇なんてないし、お位牌や遺影を置く場所もなければ置く気も無い。

1Kの小さなアパートは、一人分の荷物でいっぱいだった。

引っ越し業者が帰った後の真さらな部屋で、乃亜は大の字になつて床に寝転がった。

これで自由だ。もう、あの男の言いなりにならなくていいんだ……それでも彼女は本当に自由になつたわけではない。

彼女の左胸には小さなカラスアゲハ蝶のタトゥーが入っている。

「お前は俺のものだ。誰にも触らせない」父親はそう言つて、知り合いの彫り師に頼んで無理やり乃亜の左胸にタトゥーを入れさせた。当時十三歳の乃亜に抵抗することは出来なかった。いや、今でも抵抗は出来ないだろう。ついこの間まで、されるがままだったのだから……

乃亜の父親は180センチを超えた身長にプロレスラーのようなガ体をしていた。土木建築の会社で働いていたその男は、昔、造船

所で鉄鋼を運ぶ作業などをやっていたらしい。日に焼けた筋肉の塊のような身体と大きな手に、乃亜がかなうはずもない事は一目瞭然だった。

激しく拒絶する乃亜に父親は、焼印と刺青どっちがいいかと尋ねた。

彼女は無言で涙を流し、ただ首を横に振るだけだった。しかし、そんな抵抗が通用する相手では無い事ぐらい、既に乃亜には判っていた。

焼印は嫌だ…… その時の乃亜にとって、それはあまりにも酷な選択だった。

ちょうど左胸の乳首のすぐ上に描かれた、五百円硬貨二つ程度の大きさのクラスアゲハは、黒い羽の中に微妙に異なる数種類のダークパープルとオレンジとブルーの模様が入って、見る角度によって様々な色を醸し出し、その怪しい輝きは確かに綺麗だった。

しかし、もうこの身体は誰にも見せる事が出来ない。

中学も高校も、修学旅行先の入浴では風邪気味だと言ってみんなとお風呂には入れなかった。

高校の修学旅行は長い。三日目の深夜、みんなが寝静まった後、いや正確には本当に寝ている者などいないのだから、乃亜は見回りの教師の目を盗んで24時間入れる大浴場へ行った。

誰もいない浴槽の縁いっぱい張り巡らされた湯船からは、熱い湯気がくゆらいで立ち込めていた。

二日ぶりの入浴…… 熱いお湯が身体の芯まで染み込んで、その気持ち良さはこのまま自分がお湯に溶け出してしまうのではないかと思っただけだ。

彼女が湯船に浸かって数分後、一人の女性が浴場へ入って来た。

乃亜は身を硬くして息を呑んだ。

お湯を打つ音が木霊して、シャワーの音が広い浴場に静かに響き渡る。

「あら、こんな時間に…… 誰もいないと思っただわ」

思い切り隅っこで肩まで湯に浸かっている乃亜にその女性は言った。

乃亜は振り返って、小さな笑みと共に微かな会釈をする。

「誰もいない湯船は気持ちいいわよね」

女性が言った。

「すみません……」

「ああ、違うのよ。ひと気の少ないって意味」

女性は静かに笑うと「あなた、学生さん？」

乃亜は静かに肯いた。

「やっぱり。今日泊まっている学生さんね」

乃亜が怪訝な顔で女性を見ると

「あたし、ここの女将なの。今やっと仕事が終わった所よ」

そう言って、女将は微笑んだ。

乃亜はそう言われて、彼女の顔を湯気の中でマジマジと見つめた。先ほど微かに盗み見た彼女の裸体は潤いのある綺麗な肌だったから、もっと若い、と言っては何だが、大学生でも夜な夜な入って来たのかと思ったのだ。

しかし、顔をよく見ると、確かに夕方この旅館に着いた時に挨拶していた女将だった。

乃亜はそろそろ部屋に戻った方がいいと思い、湯船から上がる為に女将の横を通った。

女将は一瞬湯面から浮いた乃亜の左胸に視線を止めたが、穏やかに微笑んで小さく会釈をしたので、乃亜も同じように返して湯船を出た。

女性同士でもこんなに恥ずかしい…… この胸を異性の目にさらす事など、この先絶対に出来はしないと乃亜は確信した。

そしてその呪縛は、あの男が死んだ今でも左胸に残り、これからも永遠に続くのだ。

窓から入る西日が真新しい部屋の中を黄昏色に染めて、乃亜は眩しい光に照らされながら、勝手に流れる涙も拭わずに天井を見上げ

DUAL

ていた。

【第3話】

「教えてくれれば手伝いに来たのに」

瀬戸奈津美が言った。

引越しを知った彼女が初めての来客だった。いや、実際は戸口で追い返した新聞屋の勧誘が初来客か……

「荷物もそんなに無かったしさ」

乃亜はそう言って笑った。

「いいなあ。あたしも一人暮らししたいなあ」

ナツミは無邪気に笑ってそう言った。

彼女と乃亜は中学からの付き合いで、気心が知れている唯一の友人だった。その無邪気な明るさは、ある意味乃亜の心を癒してくれた。

乃亜と父親の関係を知らないナツミは、それでも彼女が父親を毛嫌いしている事を知っていた。だから、お通夜の焼香の時もお悔やみを言わなかった。

自分を私物化した父親。従わざる終えなかった精神状態の中で十六歳になった時、乃亜は唯一の反抗を開始した。

誰が、あんたのモノになんてなるもんか…… この身体はあたしのモノ。

高校に入学してからの乃亜は、川越に病院を持つ開業医と小手指に住む歯科医、その他にも複数の男性と身体の関係を持った。

それには彼女なりの条件があつて、風呂には一緒に入らない事。そして、セックスの時でも上半身の服は絶対に脱がない。

この条件を破った者は、二度と乃亜に会う事はできなかった。

「キミの胸が見たい。お金は何時もの倍払うから見せてくれないか」
何度目かのセックスの時に、歯科医は言った。

「ダメ。でも、右側だけなら見せてあげる」

「左はどうしてダメなんだい」

「あたしの左の胸には邪悪で大きな口が開いていて、それを見た男の生気を全て吸い取ってしまうのよ。だから、あなたの命に危険が及ぶといけないから」

乃亜はそう言って悪戯っぽく微笑むと、右の胸だけを歯科医の目にさらした。

薄っすらと静脈が浮き出るほどに白いそれは、小さくは無いが決して大きくは無い。世間で言う微乳に入るのだろうか。

何人かがそうやって、何度か会ううちに彼女の胸を見たが、みんな右の胸を見せただけで満足した。

それ以上求めれば、彼女と会えなくなるのを知っていたから。

胸に刺激を与えると大きくなると言うが、十三歳から父親にひたすら虐待を受けたにも関わらず、彼女の胸がさほど大きくないのは、きっと彼女が常に深い嫌悪を抱いているからだろう。

どんなに嫌悪を抱いても、どれだけでもあの男から逃れる事は出来なかった。

他の男と交わる事では、あの男から注がれる邪悪で濃密な、そしてひたすらに暗たんとした快樂から逃避する事は出来なかった。

乃亜は武蔵藤沢駅近くのビデオレンタル店でアルバイトをしている。学校があるときは夕方からだが、春休み中は時々日中から入る。今日は半額レンタルのセール初日で、乃亜も開店から駆け出された。

以前住んでいたマンションの前の通りをまっすぐ何処までも自転車を走らせる。

途中から緩い下り坂になって、それが終わる所の交差点にその店は在った。

通常の半額料金とあって、開店からお客がごった返し、レジには止め処ない行列ができる。

バーコードスキャンして、料金を頂き、DVDやビデオをレンタル袋に詰め込む。乃亜は、機械的にそれらをさばいていくだけだ。それなりの愛想にしておいた方が、AVを借りるお客は安心するらしい。

昼を過ぎると、人気作品がほとんど無くなる為、お客の波は引いてゆく。そして、夕方を過ぎると、会社帰りのサラリーマンなどが再び押し寄せる。

一般昨は、半額だからといってそう何本も借りるお客は少ないが、AVは数本まとめて借りて行く人が多い。

カウンターにドサツと置かれたDVD。そのパッケージはどれも女性がきつく縄で縛り上げられたものだった。

ふとあの男に自分のされていた事が蘇えって、全身の鳥肌が立ち、足が震えた。乃亜にとって、AVのパッケージを見るのは、他の女性たちとは違う意味で時に苦痛を覚えるのだ。慌てて全てを掻き消して我に返る。

機械的にバーコードをスキャンして、金額を言う。

しかし、乃亜が見上げたその先に佇む青年は、どう考えても高校生だった。

細い顎にスジの通った鼻とくつきりとした二重の目は、いかにも若々しく瞳の虹彩が輝かしい。

乃亜はチラリとPOSの画面に視線を移す。

1989年生まれ……自分と同じ十七歳だ。

生年月日をチェックして十八歳未満にはAVは貸してはいけない事になっている。法律に沿って厳しく運営する店が最近が多いのだ。乃亜はそのままレジを通してしまう。

代金を貰ってお釣りを渡し、DVDを入れたレンタル袋を手渡した時、彼は微かに微笑んだ。

乃亜はその瞳に映る自分の姿が見えたような気がして、心の奥で

何かが大きく弾むような衝撃と共に鼓動が早まるのを感じた。

震える鼓動が左胸の黒い蝶を羽ばたかせていた。

名前…… 名前をちゃんと見なかった。

彼が出て行った後、慌ててPOSに視線を戻すと、既に他の店員が次のお客の商品をスキャンしていた。

真鍋という名字だけが、さっき一瞬見た画面の記憶に残っていた。

【第4話】

新しい部屋は、何だか自分の居場所ではないような気がして落ちて着かなかった。

クローゼットがあるので大きな筆筒は捨ててしまった。小さな鏡台と本棚。小さなローテーブルに新しく買った液晶テレビ。

勉強机と共用のパソコンデスク。そして、木製のシングルベッド。生活用品は取りあえず揃って、生活観も充分あるにも関わらず、何故か落ち着かない。

フローリング風の床は思いの他冷たかったので、小さなラグを敷いてみた。それでも、床に座っても、ベッドに座ってもどうにも落ち着かない。

男たちと入るホテルの方が、よっぽど落ち着くかも知れない。

乃亜は、父親の葬儀が終わって一週間もしないうちに引越した。四十九日なんて知ったこっちゃあ無い。

最初の数日間は、静かな夜を連日過ごす穏やかさに心が安らいだ。それは確かだった。

しかし、さらに一週間経った頃、異常な身体の疼きに耐えられず、乃亜は自分から小手指の歯科医に連絡を取った。

そう……この落ち着きの無い身体は部屋の問題ではない。

乃亜はあの男がいなくなるまで、週に何度も凌辱され続けた。出張で出かけた時にはその日数分逃れる事が出来たが、帰ってくるとその分その行為は連夜に渡り続いた。

十三歳の夏から続いたおぞましい体験は、何時の間にか麻薬のように彼女の身体に染み渡り、全身の性感帯を犯していた。

あの男の残した呪縛は、タトウーだけでは無かったのだ。

乃亜は、歯科医の男に何時も通り人間市駅まで車で送ってもらい、そこから自転車で自分のアパートへ向かった。

乾いた夜の冷たい風は身体を包むように流れて、少しだけ心地よ

かった。

乃亜はバイト先で真鍋がDVDを返却しに来るのを待っていた。しかし、5日経っても姿を見かけないので、こっそり貸し出しテープを覗いたら、何時の間にか返却になっていた。

気付かなかったのか…… いや、そんなはずは無い。おそらく自分の入っていない時に返却に来たのだ。

真鍋幸…… 今度はしっかりとフルネームを確認した。

何処の学校に通っているのだろう。

乃亜は、もう一度彼に会いたかった。あの真鍋幸という男と無性に話してみたいという衝動が胸の中に膨れ上がった。

こんな気持ち初めてだ…… 異性に心が揺れ動いたのは初めてでは無い。

しかし、今までは夜な夜な繰り返される父親の行為に後ろめたさを感じて、同世代の男の子に対して正面から向き合う事を恐れていた。

自分の汚れた身体に嫌悪を抱き、自分を好きになれない。

そんな自分が、誰かを好きになってはいけないと思っていた。

あの男が死んだ事によって、少なくとも自分の意志に反した凌辱を受ける事は無くなった。それが、乃亜の心を少しだけ開放的にしたのかもしれない。

とりあえず住所もチェックして電話番号も記憶した。電話は携帯番号だったが、まさかいきなり自分から電話をするわけにも行かないし、家を探ねて行くわけにも行かない。

もともと乃亜にはそんな勇気などないのだ。

もし、この左胸にタトゥーが入っていなかったら…… いや、それは言い訳なのだ。いきなり素肌をさらすわけでもない。

しかし、普段は見えない部分に対しても人はコンプレックス抱き、

それが行動を消極的にする事は確かなのだ。

乃亜はラストまでの店員に挨拶をしてバックルームへ入った。お店は深夜二時まで営業しているが、高校生の乃亜は十時に上がりとなる。

裏口から出て自転車に乗ろうとした時、乃亜の携帯電話が鳴った。

【第5話】

「もう、チヨームカツク」

電話の相手はナツミだった。彼氏の事で、父親と大喧嘩して家を飛び出してきたらしい。

「行く所なくてさ……」

「いいよ。ウチに来なよ」

乃亜は快く彼女を招いた。

ナツミの彼氏は、三歳年上の専門学校生だ。彼女の父親はそれが気に入らないらしく、事あるごとに彼氏を悪く言うらしい。

今日は彼氏と一緒に遊びに行つて、帰りが遅くなった事を咎められたそうだ。

父親にしてみれば、娘が心配でたまらないのだろう。

乃亜は、そんな普通の親を持つナツミの事が、少しだけ羨ましく思い、彼女の愚痴をひたすら聞いてあげるのだった。

普通の父親……

乃亜の父親も昔はごくありふれた普通そのものだった。周りの他人から見ればそんな見かけの姿は、死ぬまで同じに映ったかもしれない。

しかし、乃亜には父と一緒にプールへ行ったり、買い物をしたりした日々が、まるで自分が生まれる前のような、それほどに遠い昔の出来事を感じるのだった。

どうしてあの男はあんなふうになってしまったのか。どうして自分に性的興奮を感じるようになってしまったのか…… 以前はそんな事考えても見なかったが、あの男が死んでから乃亜は、時々ふと考えるようになった。

母親が出ていったから、欲求を満たす相手を自分に向けたのだから…… いや、普通は風俗に行くだろう。外で女を作るだろう。いくら欲求が溜まっても、実の娘を性的パートナーにはしない。

どうして…… どうしてあたしだったの。

「でね…… 乃亜？どうしたの？」

「ううん。何でも無い。それで？なに？」

乃亜は気を取り直して、ナツミの話に聞き入った。

考えてもしようがない…… あの男があたしにした行為は事実で、

この身体に刻まれた記憶は永遠に消えはしないのだ。

朝方まで話し込んでいた乃亜とナツミは、昼近くになってようやく起きた。

ナツミが電源を切っていた携帯の留守電を再生すると、十件ものメッセージが父親によって入れられていた。

ナツミは「ムカツク」と言いながら、その日の夜には自宅へ帰って行った。

それでも乃亜にしてみれば、そんな普通の親子関係が微笑ましく感じた。

所沢で買い物をしていた乃亜は、突然女性に声を掛けられた。

「亜矢乃」

最初は自分に声が掛かっているとは思わなかった。だって、乃亜は亜矢乃では無い。

「アヤノ。何シカトしてんのさ」

そう言っつて、後ろから肩に触れられて、乃亜は怪訝そうに振り返った。

「あの……」

乃亜は顔を見れば人違いと言う事がわかるだろうと確信していた。ところがその女性は乃亜の顔を正面から見たにも関わらず

「何してんの？買い物？」

乃亜は一瞬言葉が出なかった。

マスカラを塗り重ねたガチガチの睫毛の奥に怪しく輝くダークグリーン
の瞳に、一瞬吸い込まれそうになる。紅い髪の毛に負けない
ほど真っ赤なグロスを引いた唇は、ガムを噛んでいる為か終始動き
を止めない。

「あの…… 人違いです。あたしはアヤノじゃないです」

今度は相手の女性の方が怪訝な表情を浮かべた。

「なによ、澄ましちゃって」

「は？」

「ま、いいや。昼間は他人って訳ね」

女性はそう言って艶やかなローズピンクの唇で笑みを作ると、そ
のまま歩いて下り用のエスカーレーターに消えた。

誰…… 何？

乃亜の思考はひたすら混乱していたが、自分に見覚えが無いのだ
から人違いに違いないだろうと、深くは考えず直ぐに忘れてしまっ
た。

【第6話】

赤々と燃え上がるような身体と深い漆黒の海に閉ざされた心。

自分で自分を抑えられない……

一度スイッチが入ると、バッテリーが消耗し切るまで狂ったように快感を求めて、苦しくて切なくて……

この身体はいつたいどうなってしまうのだろう……

乃亜はベッドの上で、まるで放置したビーズ人形のようにグツタリと横たえて呼吸だけが荒々しかった。

真空に放り出されたかのように、彼女の耳にはしばらくの間何も聞こえない。唯一聞こえるとすれば、高らかに波打つ自分の心臓の鼓動。それが次第に収まってゆくにしたがって、周囲の雑音が虚ろな意識の中に迷い込んでくる。

シャワーの音が聞こえる……

身体の余韻の波が収まってくると、乃亜は周囲の音に対してようやく認識を示す。

激しいセックスの後、安心してしばらく動かなくなる彼女を知っている所沢の開業医、菌部は、いつも自分のペースで先にシャワーを浴びる。

菌部志郎。彼は、乃亜が父親以外の男と初めて経験した相手だ。

川越に大きな個人病院を構える三十八歳。と言っても、開業したのは父親で彼はその後を早々と継いだにすぎないのだ。何でも、五年前に父親はガンで亡くなったらしい。

「大丈夫か」

シャワーを終えた菌部は、ベッドサイドに腰掛けて微笑んだ。

乃亜はゆっくりと肯いて、空虚な笑みを見せると、自分もシャワーを浴びる為に浴室へ歩いた。

熱いお湯が身体に染み込んで、汚れを少しだけ洗い流してくれる。

ボディソープをたっぷり使って全身を隈なく洗う。

彼女は何時も、左胸を丹念に洗ってみる。しかし、刻まれたカラスアゲハの美麗な翼は、決して消えはしない。

乃亜は男と交わる事によって、父親のトラウマを跳ね除けている。最初は怖かった。しかし、通常ではありえない父親しか知らない自分の身体が、あまりにも無常に思えた。その思いを振り払う為に、出会い系サイトにアクセスした。

初めてホテルに入った時は、膝の震えが止まらなかった。

これは、唯一あたしがあの男にできる反抗だ…… 乃亜は自分自身に言い聞かせて壁易を飛び越えた。

何てことは無かった…… どうって事無いじゃん。このぐらいはみんながやってる。

父親が彼女に施す行為に比べればみな優しくかった。

彼女は倫理の一線を超える事で、奇しくも父親からの性的虐待がトラウマとして心をえぐる事から逃れる事が出来たのだ。

しかし今は…… 彼女は熱いお湯に打たれながら考える。

これも全てあの男のせい。あの男がカラスアゲハと一緒にあたしの身体に刻み込んだ呪縛のせいだ。早熟な身体を甚振ったあの男のせいであたしは……

チェックアウトの際、ロビーに通じるドアの横を通った時、乃亜は見覚えのある顔をそこに見た。

笹沢静果…… 乃亜の担任教師だった。

彼女はどう見ても高校生、つまり乃亜と変わらない年格好の男子と部屋を選ぶロビーへと入って行った。

チェックインとアウトする者同士が顔を合わせない作りになっているこのホテルだが、実際はかなり近い場所を行き来する為、壁のアクセントにくり貫かれた穴からお互いの姿が見える時があるのだ。

乃亜は慌てて壁の飾り穴から遠ざかった。

担任の笹沢は確か二十九才。ガリガリに痩せているのに何故か出る所は出ている。

学校に来ている時はパンツスーツが多く、髪の毛もアップにしていあまり化粧気も無い為、いたって地味な印象だが、今見た彼女の姿は、胸の大きく開いたカットソーにタイトなミニスカートを履き、髪の毛も下ろしてバツチリと化粧もしていた。

一瞬乃亜は、あれは本当に笹沢だろうかと自分の目を疑ったくらいだ。

しかし、あのエロティックな女は確かに笹沢静果だった。

教壇に立ち、時には道徳的な指導で声を荒げ、何かあったら相談に乗る素振りを見せて常に優位に立とうとする。

自分達生徒よりも、何でも知っている優れた人種を装っている教師……

普段やっている事はあたしと同じじゃん…… 笹沢だって、結局男を欲するただの女じゃん。

「どうした？」

急に足取りの重くなった乃亜に、園部が言っていると彼女は急に足を早めて

「何でもない」

【第7話】

園部の白いジャガーで16号線沿いのホテルを出ると、人間市に向かつて走る。車通りも昼間に比べればかなり少なく、流れる街路灯の明かりがやけに煌々として見えた。

「何か食べていくかい」

園部が言った。

「うっん。いい」

乃亜は首を横に振って、少し素っ気無く応える。何時もの事だ。

園部は逢った時からフレンドリーに接してくるが、乃亜は必要以上に親しくなるうとは思わない。

所詮、女子高生を金で買う男なのだから。

それでも、この男たちがいなくなったら、父親の行為によってセックスに恐怖し、他の男性との交わりを一切拒絶した身体になっていた事は乃亜自身が一番よく知っているのだ。

だから、園部に対しても、歯科医の安田に対しても、そしてその他の男たちにしても、彼女が家の外で身体を交えた全ての男に嫌悪感はない。

一見矛盾しているようだが、それが乃亜の心理なのだ。

それは清純な、と言うより正常な家庭で育ってきた人には判らないかもしれない。

乃亜自身も、小学生の頃までは、極々普通の生活をしていた。

あまりにも平凡な日常に対して

「なあんか、あつと驚くような事起きないかな」

そんな事をよく口に出したものだっただ。

あつと驚く事。それは中学に入って間もなく、ある日突然やってきた。

父と母の間に何があったのか。それとも母親個人の問題だったのか。乃亜にはその時までまったく異変に気づくことは無かった。

前日の夜も、三人で普通に晩御飯を食べた。

それなのに朝起きると母親の姿は家の何処にも無かった。身の回りの荷物だけ持って、突然家を出て行ったのだ。

彼女がお気に入りだったヴィトンのスーツケースとポストンバックが無くなっていた。

あまりの突然の出来事に、乃亜はそのうち母親は帰ってくると思っていた。しかし、一年を過ぎてても何の音沙汰も無かった。

そして、次第に父親の乃亜を見る目が変わってきた。その視線の変化は彼女も気づく事が出来た。

何だか判らない恐怖が沸き起こり、自分の洗濯ものは自分の部屋に干すようになった。

それは、思春期に差し掛かった女としての警戒心が、自然にそうさせたのだろう。

しかし、夏の蒸し暑い夜、父親の部屋に呼ばれた乃亜は、取り返しつかない体験をしてしまうのだった。

一度してしまうと箍が外れたように、その男の行為は見る見るうちにエスカレートしていった。

レイプとして成立するその行為は、訴えれば逃れる事はできた。しかし、彼女はそれを誰にも言えなかった。逃れる事は出来なかった。

「ねえ、藤沢の和ヶ原ってわかる？」

窓の外を眺めていた乃亜が不意に言った。

「藤沢って、武蔵藤沢の？」

「ええ」

「何となく判るけど」

乃亜は正確な住所を口に出して、そこへ行きたいと言った。

「それなら、今は便利なものがあるから大丈夫」

園部は小さなリモコンを操作して、センターパネルに埋め込まれたカーナビの電源を入れた。

綺麗な立体画像は、ちゃんと夜景の映像で映し出されていた。

乃亜の言った住所は、真鍋コウの住んでいる場所だった。

何時も自分がバイトをしている店の前の路地を住宅街へと入り込んで、カーナビの音声ガイドンスに従って何度か左折と右折をした。カーナビは、周辺地域に到着という声を最後に、案内を終了させた。

「この辺のはずだけど、誰かの家かい？」

園部はジャガーを路地に止めて、辺りを見回した。

乃亜も周辺を見渡す。

スツと、自転車が後ろから通り過ぎた。

乃亜は慌てて身体を小さくした。

彼だ……

小さな街灯が一つ在るだけの薄暗い路地で、乃亜は何故だかそれが真鍋コウだと判った。

通り過ぎた彼の後ろ姿を、身体を縮めたまま見つめた。

心臓が破裂しそうなほどに鼓動を刻んでいた。

路地を左に入るのが見えて、乃亜はその時一瞬見えた彼の横顔が、やけに懐かしく感じた。

別に知り合いでも何でも無いのに……

「後つけるかい」

彼女の様子を見ていた園部は、ハンドルに手を掛けて言った。

「ううん。いいよ。駅に向かって」

乃亜がそう言うと、彼はゆっくりと車を走らせて、人間駅へと向かった。

【第8話】

春休みが終わると、乃亜は三年生になった。高校生活最後の年と言っても、彼女には未だ未来は見えてこない。

ただ、あの男から逃れられた現実だけが今の乃亜を支えていた。

乃亜は高校一年の春、自殺をしようと思った事があった。

それまでも何度かそう言った衝動に駆られていたが、この時はマンシヨンの屋上へ実際に登った。

十階の彼女の家から最上階の十二階までは非常階段を歩いて登った。そこから少しズレた位置にその上り口は在った。

屋上へ続く階段の入り口にはプラスチックの鎖が掛けられて、立ち入り禁止の札がぶら下っていたが、そんなものは簡単に潜り抜けて階段を上った。

両側が壁で覆われた階段は、常夜灯が細々と照らしているだけのほの暗い、やけに荒涼とした空間だった。

どう考えても、天国への階段には見えなかった。

階段を上り切った小さな踊場には、古びたテレビとミニコンポが置いてあった。誰かが粗大ゴミを放置して行ったのだろう。

その光景はまるで、今の自分の心中を抽象画で表したような、あまりにもシックリとくるものがあった。

屋上へ続く鉄の扉はカギが掛かっていたが、内側からツマミを回せば簡単に開錠できるものだった。

重い扉を開いた瞬間、外の風が強く吹き込んできて、髪の毛が大きくはためいた。

風は思いのほか冷たく、コンクリートの床に大きな給水棟が殺伐と佇んでいた。

乃亜はゆっくりとコンクリートの床を歩いた。

自分の気持ちとは裏腹に清々しく晴れ渡る空が、やけに悲しかった。

た。

地上に続く街並みの向こうには、たくさんの雲がひしめいていた。マンションは中央が吹き抜けになっている為、四角いドーナツのような形をしている。

彼女は鉄柵に手をついて、中央の吹き抜けを見下ろした。下から吹き上げる風が、乃亜の髪の毛を舞い上げた。

そこは、地獄へ続くトンネルだった……

一階のエレベーター通路まで続くその吹き抜けは、下から見上げると暗い空間に青い空や流れる雲がぼっかりと覗き、何処か幻想的だ。

しかし、逆から見たそこは、暗く遠く、まるで地の底まで延びているような通風孔のような縦穴にすぎなかった。

ぜったい成仏できない…… 乃亜は直感でそう思った。

気を取り直して屋上の縁まで歩いた乃亜は、再び鉄柵越しに下を覗き込む。何時も自分が歩いている通りが見えた。

オモチャのような車が行き交っているが、通行人はいない。

あそこまで、何秒かかるのかな……

地面にぶつかる瞬間って、どんなだろう…… 痛みはあるのかな

……

真下に広がる景色はどれも色あせしてくすみきって、何処か現実味がなくて、安っぽい小さな映画のセットをただ見下ろしているような錯覚に陥る。

ふと乃亜が視線を移動させると、向かい側にあるガソリンスタンドの従業員がこちらを見て指を指しながら仲間を呼んでいる。米粒のような小さな生き物だ。

乃亜はハツとして身を屈めると、ダッシュで屋上の扉を開けて、そのまま階段を駆け下りた。

こうして、彼女の自殺は未遂にすらならないまま終わりを告げる。その一年後、あの地獄へ続く吹き抜け部分へダイブした男がいた。乃亜はその男が、何階に住んで、どんな人間だったのかすら知ら

DUAL

ないが、あの地獄へ続くトンネルへ飛び込む恐怖は少しだけ知っているのだ。

【第9話】

帰りのホームルームで話す教師の唇には、淡い色が薄っすらと乗っているだけ。薄いファンデーションに僅かな頬紅。着けているのか判らないマスクラとアイライン。

春らしいサンドベージュのスーツは、今日もパンツルックだ。

あの時ホテルで見た女とはまるで別人だった。

乃亜は知らず知らずのうちに、笹沢静果の顔を見入っていた。

「じゃあ、当番は掃除しつかりね」

ホームルームが終わって、形だけの帰りの挨拶を済ませると、笹沢はそう言っただけで教室を出ようとした。

「あ、由衣島さん。ちよつと職員室に来て」

クラス替えが行われたが、乃亜の担任は、笹沢静果だった。殆どの教師は二年生から繰り上がって三年生の担任を勤める。

乃亜はしばらく間を置いてから、職員室へ向かった。

「引越しが終わったら教えてちょうだいって言ったじゃない」

「はあ……でも、担任が誰になるかわからなかったから……」

「先月の時点でクラス編成も担任も決まってるのよ。だから、私が言っただけでしょ」

「すみません……」

「そんなの知るか……だいたいあたしが引越しを報告したからってどうだって言うの……」

「まあ、いいわ」

笹沢は、溜息交じりでそう言う

「この用紙に新しい住所を書いて、保護者になる方の印鑑を貰ってきてね」

「保護者……ですか？」

「高校生なんだから必要でしょ。近所に親戚の方がいるのよね」

「あ、ああ。はい。そうです。貰ってきます」

乃亜は用紙を手に、いそいそと職員室を後にした。

「笹沢、何だつて？」

廊下を少し行くと、ナツミが待っていてくれた。

教室へ迎えに来たら彼女がいなかったので、他の誰かに訊いたの
だろう。乃亜の鞆も一緒に持って来てくれていた。

「別にイ、引越し先の新しい住所教えろだつて」

乃亜はそう言つて、自分の鞆をナツミの手から受け取つて歩き出
した。

三年になつてナツミとは違うクラスになつてしまったので、今の
教室には乃亜が親しく話す相手はいなかった。まあ、それでも仲良
しごっこをする程度の仲間はあるが……

それでも、一緒に帰る親友はここにいる。乃亜にはそれで充分だ
つた。

ナツミは入間駅近くの古びた商店街に住んでいる。父親はサラリ
ーマンだが、祖父母は御茶屋を営んでいるのだ。

聞いた話では、かなりの老舗らしい。

商店街の入り口でナツミと別れた乃亜は、家に帰ると、笹沢に渡
された用紙に印鑑を押して、それをバイト先へ持つて行つた。

ちよつと甘えた口調で店長に頼み、保護者の欄に親戚の住所と名
前を書いてもらう。うる覚えの親戚の名前は、本当にあつているか
は判らないがいちいち確認は取らないだろう。

「そつかあ、由衣島は今一人で住んでるんだな。大変だな」

店長の隣にいた、社員の斉藤が言つた。

「けつこう気楽でいいですよ」

乃亜はあつげらかなとした女子高生を装つて、笑顔で応える。

それがここでの彼女のキャラクターなのだ。

ここでの乃亜は、両親を失つたちよつと不幸なただの女子高生。

左胸のタトゥーと一緒に父親に刻まれた彼女の傷など誰も知らない。

乃亜が上がり時間の時間になってバックルームへ入ろうとした時、ちよと入って来たお客に目が止まった。

彼女は足早にドアの内側に隠れるように入った。

真鍋コウ……しかし、一緒にいるのは、以前所沢で買い物をしてる時に、人違いで声を掛けて来た赤い髪の女だった。

二人は楽しそうに映画の新作の棚でDVDを物色している。

どつという関係だろう……恋人同士？

乃亜は細く開けたバックルームのドアから、そつと二人の姿を目で追っていた。

心臓の鼓動が高鳴るのがわかつて、彼らに聞こえてしまうのではないかと思うと、余計にドキドキした。

コウがアダルトコーナーを指差すと、彼女に頭を叩かれて、そのままにしたDVDだけを持ってレジカウンターへ歩いて行った。

乃亜はドアを静かに閉めるとエプロンを外し、深い溜息をついた。

【第10話】

金曜日の夜、バイトを終えた乃亜がアパートに帰ると、ナツミがドアの前に座っていた。

「どうしたの？ナツミ」

ナツミはただ笑って俯くだけだった。

「また、プチ家出？」

乃亜の言葉に彼女は小さく肯いた。

「しょうがないなあ」

乃亜は肩をすくめると、玄関のドアを開けてナツミを招き入れた。ナツミは「えへへえ」と小さく笑うと、乃亜の後から玄関に入つてスニーカーを脱いだ。

「大丈夫なの？こんなにしょっちゅう家出して」

「親も、時期帰ってくるのが判ってるからね」

ナツミはそう言って笑うと「永遠に家出されるよりはマシでしょ」

熱いコーヒーをテーブルに置いた乃亜は

「でも、彼氏は一人暮らしじゃなかった？」

「最近、課題で忙しいから家には来るなって」

「そう…なんだ」

ナツミはコーヒーを飲みながら

「でも、一緒に出かけてはいるんだ」

そう言いながら、首をすくめて笑う。

「そう……」

乃亜は少しだけ不安げに笑った。

その時彼女は、何だかとても嫌な予感が頭を過つたが、何も感じなかったふりをした。

「ナツミ、ご飯は？」

「実はまだなんだ」

「じゃあ、外に食べに行こうか」

そう言つて、二人は乃亜の自転車と一緒に乗つて、駅に続く並木通りにあるファミレスへ向かった。

並木通りはゆるい下りになっているが、二人乗りの自転車は思いのほかスピードが出た。二人の髪の毛が物凄い勢いで、後ろにはためいていた。

「あつ、ヤバイ！」

「何が？」

ブレーキを握つても止まる気配の無い事に気がついた乃亜に対して、ナツミは髪を風で靡かせながらのん気に訊き返した。

「止まらないよ……ほら」

乃亜がそう言つた時、向かつていたはずのファミレスを通り過ぎた。

「なああにやつてんの？乃亜あ」

「あんたが重いから止まらないのよ」

自転車は五十メートルほど先でようやく止まりきる事ができて、二人は仕方なく上り坂を歩いて引き返した。

「もう。ブレーキ遅いんだよ。乃亜」

ナツミが笑いながら、乃亜の肩をバシバシと叩いた。

「だって、ニケツでここ下つたの初めてなんだもん」

自転車を押す乃亜も、何だか楽しい気分でひたすら笑つた。

ドリンクバーで二時間粘つて、再び乃亜のアパートへ戻ると、ナツミはバックの中にちゃっかり部屋着のスエットを持って来ていた。

「ねえ、今日は一緒に寝よう」

その夜、床に布団を敷こうとする乃亜にナツミは言った。

「えっ、べ、別に、いいけど……」

少し困惑した笑みの乃亜に、ナツミは笑つて

「大丈夫だよ、あたし変な趣味はないから」

二人は一緒のベッドで眠つた。

シングルベッドの為、少し窮屈だったが、身体が触れ合う温もりがちよつとだけ乃亜には心地よくて、でも、ちよつとだけ恥ずかし

かった。

翌日の土曜日、乃亜とナツミは一緒に買い物をして昼食を共にした。

西武百貨店の催事場で大々的な古本市をやっていると言う張り紙を見て、二人は興味にそそられ足を運んだ。

「ねえねえ、これ見て。スッゴイ昔のアイドル」

ナツミが雑誌のコーナーで昔のアイドル雑誌を見つけてケラケラと笑っている。

「うわっ、キツッー」

乃亜も、八十年代のアイドルを見て思わず声を上げる。

「あ、でも ちゃんのデビュー当時、可愛くない？」

「ええっ、なんか、田舎もん丸出しじゃん……」

別を買う気はさらさら無い二人だが、自分達の知らない時代のモノがやたらと珍しく目に留まって、小一時間も古本市で時間を潰した。

夕方にはナツミが彼氏の所に行ってみるといっているので、所沢の駅で別れた。

「追い返されたらまた宜しくね」

ナツミはそう言って笑うと、乃亜に手を振った。

「あ、そうか……」

上り電車を見送った乃亜はそう呟くと、再び駅を出て、丸井百貨店へ足を戻した。

なんだかバタバタして忘れていたが、明日はナツミの誕生日だ。

何か買っておいてあげよう。もしかしたら、今夜にも再び彼女が来るかもしれない。

乃亜は久しぶりに誰かに何かを買うと言う行為に、少しだけ胸が弾む気持ちでエスカレーターに軽々と足を踏み出した。

しかし、乃亜がナツミの笑顔を見るのは、この日が最後となった。

【第11話】

日曜の朝はやたらと暖かかった。ベッドから起き上がった乃亜がカーテンを開けると、春の陽気が直接部屋の中に降り注いで、何だか心まで穏やかな気分になる。

ベランダの数メートル先には、一軒屋の民家の庭があつて、すっかりと花の散つた梅の枝にとまつたメジロが、大きな目でチヨコチヨコと頭を動かしていた。

綺麗な黄緑色の体をしているので、よく鶯と間違える人がいるらしいが、もちろん、メジロはホーホケキヨとは鳴かない。

乃亜はパジャマのままコーヒーメーカーのスイッチを入れると、キッチンの隅に置いてある洗濯機のボタンを押した。

昨晚、ナツミは来なかつた……って事は、彼氏の所に泊まつたのかな。携帯が繋がらなかつたと言う事は、そういう言だろう。

家に帰つたのなら、携帯の電源を切るはずはない。

昨夜、一度だけナツミの携帯にコールを試してみた乃亜は、そう思つていた。

だから、ハッピーバースデーのショートメールだけ、0時すぎに送つておいた。

返信が無かつたのはちょっと寂しいけど、きっと彼氏と取り込み中だったかも知れない。

ナツミとは小学校の時から同じ学校だが、中学一年の時に初めて同じクラスになった。

二年の時にはクラスが別だったが、仲の良さは変わらなかつた。

クラスが別になつても付き合える友達は乃亜にとって初めてだった。

二年の夏、父親との事があつてから、乃亜はナツミと何時も一緒に行っていたプールにも行かなくなつた。

彼女はいつたいたいどうしたのか。何か悩み事でもあるのかと、頼りない口調ながらもしきりに気にしてくれた。

何度ナツミに打ち明けようと思ったか。その度に乃亜は涙が込み上げてきて、一生懸命それを堪えると、打ち明けようとする気持ちまでが潮のように引いていくのだった。

そして、結局彼女にも何も打ち明ける事は出来なかった。

その代わりに、乃亜は家の外ではごく普通の女の子でいられるようになった。

ナツミは、小柄な乃亜に比べると女子では大きい方で、中学の部活ではバスケットをやっていた。乃亜も次第に背が伸びたが、中学三年生頃で止まってしまふ。

ナツミも同じ頃に伸びなくなったとぼやいていたが、150センチをようやく超えた乃亜に比べて、ナツミは160センチをかるく超えていた。

それでも彼女は高校へ入ってからはバスケットを止めてしまった。

乃亜がそんな事を考えながら、テレビの画面を眺めているうちに、コーヒーの香りが部屋の中に広がった。

日曜日の朝は、何だか外の様子が穏やかで、いつもより静かに時間が流れてゆく。そうやってのんびり構える日曜の午前中は、結局いつの間にか通り過ぎていくのだ。

テレビを点けっぱなしにしたまま部屋に掃除機をかけて、洗濯して、あつという間にお昼を過ぎていた。

洗濯ものを干し終えたその時、携帯の着メロが鳴った。

モニターの表示はナツミだった。

きつと彼氏の家に泊まったのだらう。今日会えれば、プレゼントを渡そう。乃亜はそう思いながら携帯を耳にあてた。

今日一番にメールしたけど、取り込み中だった？そんな言葉を彼女は準備していた。

しかし、電話に出ると、向こうから聞こえたのはかすれたような男の声だった。

「由衣島乃亜さんですか」

「はい…… そうですけど……」

かすれた中年の声は、乃亜にはとても怪しいものに聞こえて、途端に警戒心で心を包み込んだ。

迷惑メールならまだしも、時折変な電話が掛かってくる事もあったからだ。

「ナツミの父親です……」

「あつ……どうも、こんにちは」

男の言葉に、彼女は息をついてそう返した。

前に何度か会った事はあるが、電話の声だけ聞いてもナツミの父親だと言う事は彼女には判らなかつた。

しかし、それと同時にまた別の緊張が心を呑み込む感じがした。

母親はどうと言う事はないが、誰の父親でも、乃亜は苦手だった。

「ナツミの事なんですが」

「ああ、はい……」

「昨晚は、そちらに行きましたか？」

「えっ、いいえ。あの…… 昼間は一緒でしたけど……」

どうしよう…… 何処まで話していいの……？

「夜は、何処に行くか言ってたでしょうか……」

「あ…… いえ、あの……」

どうしよう…… 彼氏の家に行ったと言えば、彼女がまた叱られるかもしれない。

ナツミと連絡がつかないのだろうか……？

一瞬の沈黙に、ナツミの父親は

「あの男の家に行ったんですね……」

「いえ…… あの、はっきりとは」

再び少しの沈黙があった。この時乃亜は、なんだか向こうの様子もおかしい事に気がついた。

それに携帯…… 着信モニターにナツミの名前が表示されたと言
う事は、今この父親はナツミの携帯電話から掛けているのだ。
どうして父親はナツミの携帯を使って電話を掛けて来たのだろう。
ナツミが家にいるのなら、どうして本人に直接訊かないのか……
その時、電話の向こうの声は言った。
「ナツミは死にました……」

【第12話】

白くて冷たい何かが乃亜の背すじを素早く伝って、頭を中心に広がった。

「あの…… いったいどういう事ですか」

「自殺したんです……」

涙を堪える父親の押し潰された声が、乃亜の耳の中で木霊した。それは、電話を切った後も、何時までも乃亜の頭の中に響き渡っていた。

彼女は力無く、崩れるようにベッドに腰を落とした。

どうして…… 昨日はあんなに笑ってたじゃない……

何で……

乃亜はハツとして顔を上げた。

アイツだ…… しかし、今はナツミに会いに行かなければ……

乃亜は急いで着替えると、玄関まで行って再び部屋へ戻った。

彼女に渡すプレゼント…… これは渡さなければ。

乃亜は何故だかそんな思いでナツミに買ったプレゼントを抱えりと玄関を飛び出した。

ナツミは所沢の駅裏に在る十六階建てのマンションの屋上から飛び降りた。

靴は履いたままだったが、彼女の携帯電話は屋上に置かれていたそうだ。

所沢まで戻ってきたなら、どうしてここまで帰ってこなかったの…… あたしの所に来れば、いくらだって話聞いてあげたよ……

一緒に泣いてあげたのに……

あたし一人…… 一人になっちゃったよ……

乃亜はナツミの亡骸にしがみ付いて何時までも泣いていた。声を

出して泣くのはいつたい何時以来だろうか。自分の事でもこんなに泣いた事は無いかもしれない。

いくらでも溢れるように、次から次へと涙が流れて枯れる気配はなかった。

あまりにも嗚咽が酷くて息が苦しくなったが、その苦しさが気にならないほど、心が張り裂けそうな彼女の悲しみは大きなものだった。

いや、彼女の心は、既に張り裂けてしまったのかもしれない。父親の葬儀とは全く違う気持ちで、乃亜は彼女を見送った。葬式はこんな悲しいものが本当なのだと実感した。

祭壇に飾られた遺影の笑顔を見るたびに、何度でも涙が込み上げてきた。

ナツミが死んで三日目、葬儀が終わって直ぐ、乃亜は洋服を着替えると自転車を飛ばして駅へ向かった。

ナツミから一度だけ聞いた事があるが住所までは知らなかった。だから乃亜は、ナツミの両親に頼んで彼女の携帯電話を見せてもらった。アドレスに記された彼氏の住所を記憶する為だった。

その時見た彼女の携帯メールの送信トレイには、「ありがとう」と言う、乃亜宛の返信メッセージが送信されないまま残っていた。どうして、返信してくれなかったの……

乃亜は、再び溢れる涙を、必死で拭った。

武蔵関の駅を降りると、右も左も住宅街が広がっていた。ブロッコ塀に張り付いた住宅地図を見て住所と番地の場所を確認する。

乃亜が歩き出すと、ちょうど同じ方向に向かうカップルが前方に歩いていた。

最初は偶然同じ方向だと思っていたが、何処までも乃亜と同じ方向へそのカップルは歩いた。

男の方は少し長めの茶色い髪が、歩く風で後ろに柔らかく靡いて

いる。丈の短いブルゾンにハードウォッシュのジーンズはよれよれだった。

女の方は、軽そうな金髪を揺らしながら、白いニットにモノトーンのタイトなミニスカを履いて、ショートブーツがコツコツと音を鳴らしていた。

乃亜は後ろから二人を観察しているうちに、異常な胸騒ぎがした。何度か、ナツミに彼氏の写メを見せてもらった事はあるが、後姿では判別できない。

不安を抱えたまま、乃亜は自分の進むべき方向へ歩いた。

少し寂れたアパートの二階、一番左の部屋に二人は入って行った。乃亜はすぐ横の電柱に付いたプレートで番地を確認する。アパート名も合っていた。そして、そのカップルが入って行った部屋番号はナツミの彼氏のものだった。

あの男が、ナツミの彼氏…… 彼女の葬儀に顔も出さずに女と手を繋いで部屋に連れ込んでいたあの男が……

乃亜は、激しい怒りが込み上げて来た。

ナツミはどんな思いで……

送信トレイに残されていた「ありがとう」の文字。乃亜に送りきれなかったその文字が彼女の中に何度もフラッシュバックした。

頭の芯が熱くなって、こめかみに針を刺したような痛みが走ると、途端に目の前に靄が掛かるような感じがした。

あまりの怒りに、彼女は意識が遠のいて行く気がした。

「なんだ、酔っ払いの姉ちゃんか」

「そんな所で寝てるとヤラレちゃうよ」

妙な話し声と、微かな笑い声で乃亜は目を覚ました。辺りは真っ

暗で一瞬ここが何処なのか判らなかった。

「駅……うっ……」

頭を動かすと、酷い頭痛がした。

ゆっくり立ち上がって駅名を確認すると、乃亜がいたのは武蔵関の駅のホームだった。

頭が混乱する。確か、駅を出て、ナツミの彼氏の家まで……

「うっ……イタぁ」

あまりの頭痛で、乃亜は再びベンチに腰を降ろして頭を抱え込んだ。

【第13話】

乃亜は何とか家までたどり着いた。頭痛薬を頬張るように飲んでベッドに横たわった。

もうろうとする意識の中、あまりの頭痛の激しさに眠りに入ることは出来なかった。

水で濡らしたタオルを頭に当てると、そのひんやりとした心地よさで、いくらか痛みが和らいだ。

それでも小一時間もしないうちに薬が効いたのか、彼女はそのまま深い谷へ吸い込まれるように眠りに落ちた。

翌朝の目覚めは良かった。昨日の激しい頭痛が嘘のようだった。

インスタントコーヒーを入れて、テレビを点ける。何時ものワイドショーが画面に映し出された。

窓の外から聞こえる小鳥のさえずりが何となく心地よくて、呆けたまま彼女はテレビの画面を見つめていた。

しかし、ふと我に返った乃亜は、自分の心にぼっかりと空いた空洞が、あまりにも大きい事に気が着いた。

ナツミ…… 乃亜が何でも話せるのはナツミだけだった。

ナツミがこの世にいない事を思い出して、途端に心が萎んでゆくのを感した。

くだらない事でも思わず笑い合え、何時も心の隅で何となくお互いの事を思いやって、会話が無くてもまったく気が置けない間柄。

そんな相手は、そうそう出逢えるものではない。

DUAL
修学旅行のこっそり入った風呂の帰り、乃亜は常夜灯が灯るほどの暗いロビーに佇む自販機でジュースを買って部屋へ戻ろうとした。

「こら、お前こんな時間に何してる」

見回りの教師に見つかった。

「ここそなんだ。ジュースを買いに来てたな。夜十時以降は部屋から出るのは禁止だろう」

その男性教師は生活指導も行っている学年主任だった。彼女の顔を確認すると

「おまえ、三組の結衣島だな」

乃亜は別に叱られるくらいどうでもよかった。この旅行中は父親から逃れられる。それに比べれば教師の説教ぐらいなんでもない。

乃亜は沈黙した。

「先生、違うんですう」

ナツミが廊下の角から顔を出した。

「あたしが頭痛くて、薬飲むのに乃亜が、由衣島さんが飲み物買って来てくれるって……」

「なんだ瀬戸、頭痛か？」

「あたし、頭痛持ちなんです」

「しょうがないな…… 薬はあるのか？」

「はい」

「じゃあ、静かに部屋に戻れよ」

教師はそう言っ、廊下を歩いて行った。ナツミは教師に背を向けて、小さく舌を出した。

「ナツミ……」

「乃亜がいなかったから、どうしたのかわかって」

ナツミはそう言っ笑うと「お風呂？」

「えっ、うん……」

「石鹸の匂い。先生に気付かれなくて良かったね」

「うん。髪の毛乾かしてきてよかった」

二人は声を押し殺して笑いながら、忍び足で部屋へ戻った。

おおらかで前向きで、少し呑気なナツミ。彼女を死に追いやるほ

どの何があつたの男とあつたのだろうか。

昨日はそれを確かめたかつた。彼氏に会つて、いったい何があつたのか訊くつもりだつた。でも、あの状況を見て、乃亜には理解できた。

他にも女がいたのだ。

ナツミは、それだけ彼に対して本気だつたのだ。

細かな経緯などもうどうでもイイ。異常な憎悪だけが彼女の心の中を支配した。

乃亜はあの時、あの男、ナツミの彼氏を純粹に殺してやりたいと思つた。

『今朝、東京都練馬区関町……………で、専門学校生の市川信雄さん（20歳）が自宅アパートで胸などを刺されて殺されているのが発見されました。同じく田中圭子さん（19歳）の遺体も発見されており……………』

テレビから発せられた音声に、乃亜は一瞬耳を疑つた。

思わずテレビの画面を食い入るようにつめる彼女の思考がグルグルと回つた。

『近隣の話では、市川さんの部屋には複数の女性が入り出ししており、何らかのトラブルに巻き込まれた可能性もあると見て……………』

あの男だ。ナツミの彼氏が殺された…………… 殺されたのは昨日…………… あたしが見かけた後だろう。一緒に殺された女性はあの時一緒に部屋へ入つて行つた娘だろうか。

きっと、他にも女がいたりして恨まれていたんだ。

自業自得だ。でも…………… あの時、あの場所に犯人が潜んでいたかもしれない……………

そう思うと、乃亜は、何故だか身体中の震えが止まらなかつた。

【第14話】

乃亜は最近頭痛に悩まされていた。頭の芯から血流の波にあおられるような激しい痛み。そして、時々記憶が飛んでいる事に気が付いた。

いった何時からなのかは自分でもよく判らない。

自分の記憶が飛んでいる事すら忘れているのかもしれない。

普段ほとんど一人の彼女にとって、記憶が飛んでいる事への弊害もなければ、それを指摘してくれる人もいない。

ただ漠然と腑に落ちない程度にすぎないのだ。

一日一回は入っていたナツミからのメールが来なくなると、乃亜の携帯電話のメールフォルダは何時も空になった。

迷惑メールばかりが目について、速攻削除する。

アレから一週間、乃亜の心の中は何をやっても空虚で、バイトもずっと休んでいる。

昨晚、開業医の園部からメールがあつたが、返信もせずに削除してしまった。

日曜日の昼過ぎになって、携帯電話が鳴った。バイト先からだ。

「体調が悪くて……」と、一度電話を入れたきりで一週間近くも休んでしまっている。

クビかな…… 乃亜は重い気分で通話ボタンを押した。

「ああ、由衣島さん？」

「はい……」

「どう、身体の具合は？」

「ええ、まあ……」

「今日これから出られないかな。友岡が風邪で休みなんだよ」

クビの通告ではなかった……

乃亜は、何となく自分を必要としてくれている事に応えようと思つた。

こんなにも無気力で、いい加減で、そんな今の自分でも、声を掛けてくれる人がいると思うと、何だか途端に申し訳ない気持ちになった。

「判りました。これから行きます」

「本当かい。助かるよ。じゃあ」

こんな自分でも、まだ当てにしてくれる人がいるんだ…… 乃亜はジーンズに履き替えると、長丁にジップアップパーカーを羽織って出かけた。

自転車に跨ったとき、パーカーの左の袖口に黒い小さなシミを見つけた。

何だろう…… 何時着いたのだろうか、そのシミはカリカリと硬くなって血痕らしい事がわかった。

乃亜は知らないうちに、何処か怪我でもしたのかと思い、自分の手や指を見たが何処にも傷は無かった。

これ、取れ無そう…… 乃亜はそう思うだけで深くは考えなかった。

バイトに入った乃亜は、何だか異常な忙しさに、ゴールデンウィークに入っていた事を気付かされた。

忘れていた…… この二ヶ月に満たない間、色々な事が集約して時間経過が判らなくなっていた。

もともとゴールデンウィークなんて関係ない。何時も、父親が休日出勤や出張に出してくれる事ばかり望んでいた。

それでなくても、あの男が休みの時は陽の光の射す部屋の中で、激しい凌辱がおこなわれたのだ。

だから乃亜は、父親が目を覚まさないうちにバイトに出かけた。バイトが無くても家を出た。

でも、判っている。夜家に帰れば、もっと激しい恥辱行為が待っているのだと。

それでも、その場だけを逃れたい一身で彼女は出かけるのだ。

昼間だけは普通の高校生として過ごしたかった。どうしても、そ

うしたかった……

九時を過ぎて、お客の波はひと段落した。店長が、缶コーヒーをおごってくれたので、乃亜はバツクルームで一息ついて、再びフロアーに戻るうとドアを開けた。

そこには、真鍋コウが佇んでいた。

「ビックリしたあ」

突然ドアが開いたので、コウは驚いて一瞬固まっていた。

「ご、ごめんなさい……」

俯きながら、何とかそれだけは言えた。

突然の再会に、乃亜も身体が硬直した。

「亜矢乃……だよね」

コウはそう言って微笑んだ。

その言葉に乃亜の心臓が、一度だけ大きく跳ね上がった。

まただ…… 亜矢乃ってだれ？あたしにそんなに似ているの……？

「いえ…… あたしは……」

「俺コウ、金曜日にボスコで会ったろ」

「金曜日？ボスコ？」

「所沢のカフェだよ。忘れるほど呑んではいなかったよね」

「あの…… あたしお酒飲まないし…… ボスコって店も知らない」

乃亜には何の事だかさっぱり判らなかった。

「麻希が言った通りか……」

コウは少し苦い笑いを浮かべ「君は外で会っても知らん顔だって」

乃亜は彼の言葉に困惑した。

「ち、違うよ。本当に知らないんだもの…… それに、麻希ってだれ？」

コウはさすがに怪訝な笑みを浮かべた。ポケットから携帯電話を取り出して写真画像を乃亜の顔に差し出す。

そこに写っているのは、以前声を掛けられた真っ赤なグロスを着

けた女性。この前コウとこの店に来ていた女性だった。

その娘と肩を組んでピースサインを出すのは、紛れも無く乃亜の姿だった。

何時もはほとんど化粧をしない乃亜だが、写真の中の自分は隣の娘と同じような真っ赤な口紅を着けていた。

それを見た乃亜は言葉が出なかった。

【第15話】

「隣のこいつが麻希さ」

コウは乃亜と仲良く肩を抱き合っている紅い髪の娘を指差した。

「本当に憶えてないのか？」

青ざめた表情で写真を見入る乃亜に、コウが言った。

まるで現実を逃避した世界の出来事のように、画像に移るその笑顔は明るくて無邪気なものだった。

「由衣島、どうした？」

店長が離れた場所から声を掛けてきた。その声で、乃亜はいきなり現実に引き戻されたような気がした。

「あ、すいません。今いきます」

乃亜は店長にそう言ってから

「ねえ、今日の夜会えない？詳しく聞かせて」

「あ、ああ。いいけど」

「あたし、ここ十時に上がりだから」

乃亜はそう言って、コウの返事も聞かないうちに、足早にレジへ戻った。

バイトが終わると、外でコウが待っていた。

「ファミレス行こう。麻希も来てる」

「呼んだの？」

「ああ。その方がいいだろ」

二人は国道沿いに在る、近くのファミリーレストランへ向かった。店内に入ると、麻希はコーヒーを片手に微笑んだ。

窓際の席は、店内の明るさが外の暗闇を別世界のように映し出していた。まるで、窓枠の中に描かれた、薄汚れた暗い絵画のようだ。

乃亜は頼んだ料理に手を着けるのを忘れるほど、二人の話に聞き入った。

麻希が乃亜と知り合ったのは三月半ばのボスコというカフェバーで、それから度々一緒に呑むようになったという。

そして、乃亜と会話していた麻希は、亜矢乃の喋りは、もっとハイで乱暴だと言った。

「俺も、話してみても、あれ？やっぱ人違いか？って思ったよ」

コウが言った。

「でも、どう考えても亜矢乃だよ」

乃亜の顔を見つめ直すようにして、麻希が言った。

その瞳は綺麗な黒色で、以前会った時はカラコンをしていたのだと、乃亜は気付いた。

コウは最初にレンタル店のレジで乃亜と会った時、知った顔だったので少しはにかんだ笑みを浮かべたのだ。

「でも、そんなに親しくなったなら、携帯番号くらい知ってるんじゃないの？」

乃亜が二人に言った。

「亜矢乃は番号教えてくれないよ。あたしの番号は入ってるはずだよ。コウはまだ教えてないか」

乃亜は慌てて自分の携帯を取り出すと、アドレスデータを引き出した。

二ノ宮麻希…… 自分が知らないはずの麻希の番号が、しっかりとメモリーに入っていた。

乃亜は息を飲んでそれを見つめた。

学校の友達では無い。そんな名前の知り合いは同級生にはいないのだ。これはどう考えても、今日の前にいる、自分にとっては今日初めて言葉を交わした二ノ宮麻希以外の誰の番号でもない。

乃亜の血の気が引くほどの驚きを見て、コウも麻希も何となく気の毒そうな目で彼女を見つめていた。

乃亜はひと通り二人から話を聞き終えると、ようやくアイスコー

ヒ―に口を着けた。

氷がだいぶ解けて、上の方が半透明な色をしていた。
まるで現実味が無い。

自分が自分の知らない間に、夜な夜な飲み屋に通っていると言っ
のだろうか。

自分の知らない化粧を施して、自分が飲んだ事も無いカクテルを
手にして……

「ねえ、一度お医者に見てもらった方がいいんじゃない」
麻希が心配そうな顔で乃亜を見つめた。

最近知らない名前からメールが入る事がある。

乃亜は出会い系の迷惑メールの類だと思って何時も速攻削除して
いるが、もしかして自分の知らない間に会っている人は、コウト
麻希だけではないような気がして来た。

時折、いつの間にも眠ってしまったのか記憶がない事がある。

朝目が覚めるとベッドの中で、何時もお風呂に入って、何時パジャ
マに着替えたのかも判らない。

そんな日の朝は頭痛が酷くて、何時も考える事をお座なりにして
しまう。

自分の知らない所で動き回るもう一人の自分…… 何時かテレビ
で見た事がある。

そんな…… あたしはいつたい何者………？

【第16話】

コウと麻希に会ってから三日が過ぎた。

この日乃亜は、朝から頭痛が酷くて学校を休んだ。激しい頭痛で目が覚めたくらいだった。

学校へ連絡しようと思ったが、それさえも困難で、電話に手を伸ばしてはみたものの、結局はそれを手に取る事を止めてしまった。

何とか一端ベッドから這い出て、薬を空腹の胃の中に流し込んだ。通常二錠でよいものを三錠飲んだ。

空腹ではまずいだろうと思いい、ココナッツサブレを数枚、無理やりに口の中へ押し込む。

冷たい濡れタオルを額に当てて、再びベッドへ横たわる。布団の中へ潜り込む気力さえ無い。

そのまま眠気と頭痛の狭間でまどろみながら時を過ごす。

昼を過ぎる頃にはほとんど治ってしまったが、わざわざ午後の授業だけ出ようとも思わないので、窓から入る午後の陽射しにうつろいながらベッドの上で横になっていた。

それに、よくよく考えたら、今日はゴールデンウィークの中日だから午前授業だ。

ふいに携帯の着メロが鳴った。メールの着信だった。

どうせまたおかしなメールに決まってる…… 乃亜はそう思いながら携帯電話を開いた。すると、送信者はコウだった。

彼女は添付された画像を見て、背筋が凍りついた。

うつろいでいた意識は何処かへ飛んで行き、残ったのははっきりと現実を見つめる自分。しかし、その現実さえも今は不完全なものに思える。

携帯の液晶画面には、カクテルグラスを持ってウインクをする自分の姿があった。

服装は普段とあまり変わらないカジュアルなものだが、目元のメイ

クに気合が感じられる。

乃亜は思わず自分の持つているマスカラや口紅を確認する。初めて自分の知らない自分を見た時にも感じた違和感。着けた事もない色の化粧品。

ドラマや映画じゃないのだから、亜矢乃が自分自身だとすれば、彼女の持ち物は自分の持ち物のはずなのだ。

「違う……こんな色の口紅は、あたしは持ってない」

高校生の彼女は普段ほとんど化粧はしないし、バイトの時でも淡い色の口紅をリップブラシで薄く唇に乗せるだけだった。

マスカラやアイラインも持つてはいるが、あまり使わないので減りが少ない。

そんな一見して数少ないメイク道具は、全て鏡台の上に並べてある。乳液やローションの方が、ビンがデカイ分目立つし、ヘアケア用品の方が多いくらいだ。

乃亜は普段あまり開けない鏡台の引出しを、片っ端から開けてみた。

三段目の小さな小物入れ用の引き出し。上の段に比べ、それを二列に分割して小分けにモノを入れられる場所だが、この鏡台を買ってから何も入れた事は無い。

少なくとも、乃亜自身はそう記憶している。

あった……この色だ……その引き出しの中には、他にも幾つかの、やはりきつい色のグロスがある。しかし、何時買ったのか、まったく記憶に無い。

同じように隣の引き出しを開けると、様々なコンシーラやブラシが入っている。

本人には記憶が無いのに、それらは明らかに使っている。特にマスカラとアイライナーの減りは著しかった。

何だか訳が判らなくて、気味が悪い。

これを狐に抓まれたみたいだ。と言うのだろうか…… 乃亜はついそんな事を考えてしまっていた。

その時、乃亜の携帯電話が鳴った。

乃亜は少し躊躇したが、意を決して通話ボタンを押した。

「俺、コウだけだ。その後どうだい」

「別に……あんまり変ってない」

電話の相手がコウだとわかって、密かに胸を撫で下ろす。

「そうか……メール見た？」

「ウン」

「昨日の夜会ったよ、亜矢乃に…… 乃亜は昨日の事覚えてる？」

乃亜は昨夜も知らないうちに眠っていた。バイトから帰って来て、お茶を飲んだところまでは憶えているが、どうもその先が判らない。だいたいそんな日の翌朝は、今朝のように頭痛がひどくて、いちいち考えられないのだ。

乃亜の無言の返答に、コウは

「やっぱり憶えてないんだね」

「ウン…… 一度家に帰ってるのは確かだけど……」

乃亜は、呼吸を調えるように大きく息を吸うと「何処で会ったの？」

「何時ものところさ」

「そう」

乃亜は、フツと笑って「何だか楽しそうだった……あの写真」

そうだ。この前コウに見せてもらった写真もそうだったが、麻希やコウと一緒に亜矢乃の笑顔は全く作っていない。

これが本当にあたしの笑顔なのだろうか……

彼女は、写真の中で微笑む自分の姿を羨ましくさえ思うのだった。閉ざされた暗闇から抜け出して明るく元気に振舞う自分。もしかしたら、それが亜矢乃の姿となって現れたのかもしれない。

乃亜はそんな気がした。

【第17話】

それからコウと乃亜は、頻繁に会うようになった。もちろん、結衣島乃亜として。

一見澄ましていて、とっつき難そうに見える彼だったが、何処にでもいる普通の男の子だった。

コウは所沢にある高校に通っている。自宅は武蔵藤沢だったから、彼が入間まで来る時もあったし、乃亜が所沢まで出る事もあった。

日曜日には航空公園まで出向いて、芝生の上で乃亜が作ったお弁当を広げたりもした。

淡い陽射しに照らされた彼の茶色い髪が、風でそよぐ姿が乃亜は好きだった。そして、彼の笑顔の中で光る澄んだ瞳は、まるで精霊が宿ったように乃亜の心を捕らえた。

彼の瞳に見つめられると、乃亜の心は少しだけ浄化されるような気持ちになった。

何度目かに会った夜、コウが乃亜の部屋に来た。

「一人暮らしの部屋に入ったのは初めてだな」

コウはそう言って笑うと「女の匂いがする。いや乃亜の匂いかな」

「何それ？ どんな匂い？」

「甘くて、切ない香り」

「フレグランスかムースの香りでしょ」

乃亜は、紅茶の葉をティーポットに入れると、お湯を注ぎながら言った。

「そうかもね」

コウはただ笑って、ベッドの上に腰を下ろして足を投げ出した。

「ねえ、亜矢乃とは、した？」

「なんだよ急に」

「うっん。何となく訊いてみたかったの。だって、あんなに開放的は笑顔を浮かべるんだもの」

コウは紅茶を一口飲むと

「俺にその気は在るんだけど、彼女、意外と固いよ」

乃亜はコウの言葉に思わず吹き出した。

「キミは？」

「何？」

「乃亜も固いの？」

「試してみる？」

コウは乃亜の顔に自分の顔を近づけると、そのまま唇を重ねた。

乃亜は彼に押し倒されるまま、身体を委ねた。

彼女は、初めて自分からＴシャツを脱ぎ捨てた。何故かは判らなかつたが、燃え上がる身体の熱が、そうさせたのかもしれない。

そんな気持ちになったのは初めてだった。これが人を好きになると言ふ事なのだろうか。

全てを受け入れて欲しくて、全てを見て欲しくて……

コウは、一瞬乃亜の白い胸に目を止めると

「綺麗だ……」

乃亜はほくそ笑んで「胸？それとも、カラスアゲハが？」

「これ、カラスアゲハつて言うの？」

コウはその美麗な翼を優しく撫でると「小さいときに見た時ある」

「あたしの事は縛ったりしないよね」

「何？」

コウは、乃亜の胸の上で顔を上げた。

「エッチなDVDを借りてたでしょ」

「ああ、あれは、自分ではとても出来ないから面白いんじゃないか」

そう言つて微笑むと、彼は乃亜の胸に頬をつけた。

コウの頬はスベスベしていた。その温かさが乃亜の胸に優しく伝わり、それはずっと奥の方まで染み渡つた。

肋骨を抜けて心臓を抜けて、そして心の奥まで浸透すると、何だか自分の気持までが優しくなるような気がした。

彼の反応を見るまでは怖かつたけど、全然恥ずかしくなかつた。

彼ならきつと受け入れてくれると思った。

もしも、まだナツミが生きていてくれたら、今ならきつと打ち明けられる。彼女もきつと受け入れてくれるだろうと思った。そして、ちよっぴり悲しい顔で慰めてくれたに違いない。

生きているうちに打ち明けておけばよかった。

彼女の生死とはまったく関係ない事なのに、ナツミに秘密を持っていた事が、何だかとてもない後ろめたさを生み出して、涙が込み上げてきた。

生々しい息使いのコウが、途端に愛しく感じて、乃亜は彼の頭を両腕で抱えるように包み込んだ。

自分が少しだけ大人になった証拠なのだと思った。

【第18話】

コウはバンドをやっている、スタジオ練習のある日、その帰りにBoscoに寄るのだと言う。

乃亜は、あえて彼が来ない日を選んで、夜の所沢へ向かった。

駅前の商店街を歩くと、まだまだ行きかう人は多く、居酒屋からの出入りが目立っている。

酔っ払った大学生風の連中が、わけの分からない奇声を発していた。

雑居ビルの二階。細い階段を上がって、乃亜は木製の重いドアを開いた。ドアの横に在る小さなショーウィンドウにはBoscoと小さなネオンが誇らしげに光っていた。

店内は思いの外落ち着いた雰囲気で、洋楽のオールデイーズが流れていた。カウンターは意外に長く10席以上は在り、4、5人の客が別々に酒を飲んでいる。

黒服を着たバーテンは二人いるが、一人は映画で見るとなりーゼントスタイルの黒髪が、ほの暗い店内の僅かな照明に光沢を見せていた。

店内は、間口からは想像できないような広さで4、5個のテーブル席が並び、中央の太い柱の周りにもそれを囲むようにスタンディングテーブルがある。店内の半分は客で埋まっていた。

ウエイトレスが二人、優雅にフロアを歩き来している。

乃亜はカウンターの席に腰掛けると、スクリュードライバーを注文した。

「あれ？化粧してないから誰かと思ったよ。亜矢乃じゃん」

知らない男が声を掛けてきた。

金髪のロン毛をかき上げながら微笑むその男は、この薄暗い店内でもサングラスをしていたが、おそらくサングラスを外したとしてもまったく見覚えは無いだろう。

彼と亜矢乃がどれほどの親しさなのかは知らないが、やはり、知り合いは他にもいたのだ。

「あたし、乃亜。亜矢乃とは双子なの」

乃亜はそう言っただけで知らない男に笑みを送った。

男はサングラスの奥の目を見開いて驚くと「マジで……」

「マジで」

乃亜が正面を向くと、バーテンも怪訝な笑みを浮かべていた。

その時、入り口のドアが開いた。

「お、来たね」

リーゼントのバーテンが言った。

麻希が入って来たのだ。

麻希はバーテンに向かって軽く手を上げると、視線をカウンターに移して「あら、来てたのね」

彼女はそう言いながら乃亜の隣に座った。

「あんた……乃亜？」

彼女は近くで見る雰囲気、すぐに亜矢乃ではないと気がついた。

「亜矢乃って、双子なんだって」

バーテンが麻希に言った。

麻希は少し驚いた顔で乃亜を見返すと、彼女の何かを訴えるような視線に

「あ、ええ……そんな感じ」

ちらりとバーテンに笑みを送ってそう答えた。

「何で、来たの？」

麻希は乃亜に顔を近づけて、出来るだけ小声で言った。

「何となく、来てみたくて」

「今日は、コウは来ないと思うよ」

「知ってるよ」

「そっか、あんたたち付き合ってるんだってね」

「えっ……」

乃亜は一瞬、返事に困ってしまった。

「大丈夫よ。あたしの彼氏ってわけじゃ無いんだから」
「そうなの」

乃亜は、スクリュードライバーを飲みながら「でも……」
「でも、何？」

麻希はそう言っつて、コロナビールを瓶のまま持ち上げると、グツと啜えるようにして口へ流し込んだ。

「でも、寝たか。って？」

乃亜は詰まっつた言葉を言い当てられて、さらに言葉を呑み込んだ。
「寝たよ」

麻希はさらにビールを口に着けながら「でも、もう一ヶ月以上も前ね」

「コウは、亜矢乃をここで見かけるようになってから、あたしとは寝なくなつた」

麻希はそう言っつて、少しだけ悲しい目で微笑んだ。

「でも、よかつたじゃん。コウは見かけよりいい奴だよ」

「うん……」

乃亜は、何となく頷いて、カクテルグラスを空にした。

コウは本当は亜矢乃が好きなんだ。亜矢乃とセックスしたかったんだ。あの時言つたコウの言葉は本当だった。

じゃあ、あたしは代用なのだろうか。

確かに亜矢乃はあたし自身だ……

しかし、人格は別だから、亜矢乃が自分自身という気持ちは、乃亜の中にはまっつたく無かつた。

帰りのタクシーで、乃亜はゆっくりと流れる夜の帳を、静かに眺めていた。

【第19話】

五月の風は暑かった。晴れ渡る空から注ぐ陽の光りは眩しくて、クラスの女生徒たちは日焼け止めを手にしたりする。

「乃亜、最近元気になったよね」

同じクラスのめぐみが言った。

「そう」

乃亜は何となく頷いて笑みを返す。

隣のクラスだったナツミの自殺は、全ての生徒が知っている事で、彼女と一番仲がよかったのは乃亜だと言う事もこのクラスの誰もが知っている。

ナツミが死んでから一ヶ月。まだ四十九日も終わっていないのに、元気になったと言われる事が、乃亜は何だか嫌だった。

まるで、もうすっかりとナツミの事を自分が忘れてしまったように思われているみたいで、めぐみなりに気を使った言葉だと言う事は充分に判っているのだが、それでも素直に受け入れる事が出来ない。

「ねえ、カラオケ行くけど、乃亜も一緒に行かない？」

当番の掃除が終わって、帰り支度をしている乃亜に、再びめぐみが声を掛けてきた。

このクラスでは、一番よく話しをするのがめぐみだった。

「うん。いいよ」

乃亜は、何となくOkした。今日はバイトが無いし、彼女の気遣いが何となく判っているから、断りづらかった。

以前なら直ぐに断ったかもしれない。でも、これを断ったら、自分一人だと言う事を知っている。

前はそんなの全然平気だったはずなのに、コウと一緒にいる時間が増えた分、一人でいると時々寂しくなる。

他のクラスメイト三人と一緒に昇降口を出て、自転車を押しなが

ら騒がしく校門まで歩いた。

女同士で四人も連なるのは、乃亜には不慣れで、何となく会話に入れなかつたりする。そんな彼女に気づくと、めぐみは必ず話を振ってくれた。

「ええ、マジでえ。乃亜はどう思う？」

気後れしながら、笑顔で応える。

そんな感じで校門を出て、みんなが自転車に乗ろうとした時だった。通りに一人の年配の女性が立っている事に乃亜は気づいた。

真っ直ぐと乃亜を見つめている。

乃亜は何処のオバサンだろうと思って視線をそらそうとしたが、その瞬間に彼女の頭の中に幼い頃の思い出が駆け巡った。

他の三人は、その女性を気にも留めずに話しに夢中になっていた。

「お、お母さん……」

乃亜は、思わず立ち止まって呟いた。

「えっ？」

めぐみたちが、自転車に乗ろうとした体勢のまま、嘩然とした顔で一呼吸遅れて立ち止まると、乃亜と年配の女性を交互に眺めた。

「元気だった？」

その女性は静かに言った。

その言葉は乃亜の頭を素通りして、何処か遠くへ飛んで行った。

「お父さん、亡くなったんだってね」

再び、乃亜の母親である女は静かに言った。

そんな事はどうでもいいんだよ。あんたがいなくなってから、あたしがどれだけあの男に酷い目に遭っていたか。どれだけ辛い日々を送ったか。

あの男が死んでからよりも、アイツが生きている時の方があたしはよっぽど辛かった。

あたしが、マンションから飛び降りようと思った事だって知らないくせに。

そんな事、何も知らないくせに……

母親に会えた懐かしさや嬉しさよりも先に、乃亜の心の中にはそんな思いだけが迫り出して来た。

もう、乃亜の視界にはめぐみたちクラスメイトの姿は映っていなかった。

彼女は掴んでいた自転車を放り出すようにしていきなり駆け出すと、母親の横を一気に擦り抜けた。

「ちよつと、乃亜」

めぐみの声が背中から聞こえていたが、乃亜にはそれを認識して反応する余裕は無かった。

乃亜は国道沿いの歩道を走っていた。向こう側へ渡りたかったが、信号が合わなくて渡れなかった。でもあの女から遠ざかりたかった。だからひたすら走った。とにかく走った。

気が付くと、人間駅のすぐ傍まで来ていた。

めぐみたちと行こうとしていたカラオケBOXが目の前にあった。振り返ると、今来たばかりの16号線の学校へ続く歩道は、カーブの先に消えていた。

乃亜は大きく肩で息をしながら、お城のようなカラオケBOXの建物を見上げた。

頭の中が混乱して何も考えたくなかった。何も考えたくないのに、母親と過ごした小学校までの日々が次々と現れて、頭の中をぐるぐると駆け巡った。

小さい頃ピーマンが食べられなかった乃亜に、しきりに食べさせようとする母親の姿を思い出した。

ここ数年は思い出した事も無い母親の笑顔が、彼女の中で優しく微笑んでいた。

「ずいぶん老けてた……」

乃亜は深く息を吸い込みながら、額の汗を拭って呟いた。

DUAL

【第20話】

乃亜はとぼとぼと重い足を引きずるようにアパートへ帰ってきた。途中、めぐみからメールが入った。

『自転車、お母さんが乗って行ったよ』

何処に乗っていったと言うのか…… 乃亜は完全に思考力を失っていた。

アパートの敷地に入ると、階段にはタバコを吹かす母親の姿があった。

めぐみにここの住所を訊いて来たらしい。

「お母さん、タバコ吸うの？」

「あたしも、いろいろあつたからね」

そういつて、乃亜を見上げた母親の笑顔は、さっき見たときよりもずっと年をとっているような気がした。

「こんな小さなアパートに一人で住んでいたんだね」

乃亜の部屋に入った母親は、そういつてテーブルの前に座ると、辺りを見回した。

「小さいつていつても、一人にはちょうどいい」

乃亜は、母親にお茶を差し出して、向かい側に座ると少しだけ笑顔を見せた。

「あたしもあれからいろいろあつて……」

「聞きたくない」

乃亜は途端に母親の言葉を遮った。

「勝手に出て行つたくせに、そんな身の上話なんて聞きたくないよ」
乃亜は俯いたまま、母親の顔を見ようとはしなかった。

自分で勝手に好きな道を選んだくせに、その事についての愚痴なんて聞きたくも無い。言い訳も聞きたくない。

あたしは選べなかった。何も選べなかった。唯一選べたとすれば、自分の命を絶つことだった。でもそれは、あの男から逃れる勇気とは別の覚悟が必要だった。

その覚悟がない自分は、結局は現実の濁流に流されながら掴まる場所も無く、ただもがき続けた。そして、溺れる寸前で、あの男は死んだ。

あたしのこれまでを訊こうともしないで、自分の事ばかり……
「お茶を飲んだら、出て行ってください……」

乃亜は俯いたまま呟いた。

母親は、お茶に手を付けずに立ち上がると

「ごめんね。乃亜」

そう言って、玄関のドアを開けた。

乃亜は振り向きもせず、ドアの閉まる音だけを背中で聞いていた。

込み上げる涙の意味は判らなかった。

しゃくりあげる声が、夕暮れの陽射しを受ける小さな部屋に響いていた。

陽はとつとつに暮れて、カーテンを閉めていない窓の外には、無感情な暗闇がただ漠然と広がっていた。電気も点けないまま月の薄明かりだけが差し込む静寂した部屋の中で、乃亜はベッドの上で膝を抱えたまま壁に背を付けていた。

今何時なのか、どのくらいの時間が過ぎたのかも判らない。

DVDレコーダーの小さなモニターの明かりがやけに明るく見えるが、表示している時間は小さすぎて読み取れなかった。

携帯電話の着信ランプがひと際明るく輝いて、着メロが鳴った。

乃亜はその音と光りに自分を取り戻したかのように立ち上がると、部屋の電気を点けて、携帯電話を手を取った。

着信モニターの表示は相田めぐみだった。
「もしもし」

乃亜の声は何時に無く弱々しかった。

「ああ、あたし。大丈夫だった？」

「うん。ごめんね、カラオケ行けなくて」

「そんなのいいよ。お母さんどうした？」

「うん。帰ってもらった」

「帰ったって？ 何処に？」

「知らない」

「乃亜…… 本当に大丈夫」

「うん。有難う」

「あたしさ…… 困った事があつたら力になるからね」

「ありがと、メグ」

【第21話】

相田めぐみとはナツミと同様に、小学校から知っている仲だった。三年生から六年生まで一緒のクラスで、まだナツミとは知らない仲だった当時は、何時もめぐみと一緒だった。

しかし、中学に入つて一度も同じクラスにならなかった事もあり、めぐみと乃亜はいつの間にか赤の他人になつてしまった。

同じ高校へ入つた事はもちろん知っていたが、やはり同じクラスにならなかつた為に、特に親しい付き合いは無かつた。

高三になつて、久しぶりに彼女と同じクラスになつたものの、時の流れはお互いに別々の親しい友人を作つて、教室の外で関わり合う事はやはり無かつた。

でも、ナツミがいなくなつて、教室で最初に声を掛けて来たのはめぐみだった。

乃亜がナツミと一番親しかつた事は、みんなが知っていた。

まだ、クラス替えがあつてから間もない四月、みんな乃亜に気を使つあまり、声をかける者はいなかつたのだ。

めぐみがいなかつたら、今のクラスに馴染む事が出来なかつたかもしれない。

二年まで同じクラスだった人はもちろんいるのだが、めぐみの方が話し易かつたし、やっぱり気が合うような気持ちになつた。

それでも、ナツミがいなくなつたから今度はめぐみ。みたいな事が嫌だつたから、乃亜は意図的にめぐみと一定の距離をとろうとした。それは、クラスのみんなとも同じだった。

他の誰かと親しくする事が、ナツミに対する裏切りのような気がして、後ろめたさを感じて、結局誰とも仲良くできなかった。

めぐみは彼女なりに乃亜に気を使いながら、少しずつ友達としての距離を詰めて来る感じがした。乃亜にはそれが時に心の負担になる事もあつたが、今日は何だか素直に嬉しかった。

自分を心配してくれる彼女の気遣いが、心地よかった。

「電話？ 彼氏？」

カラオケの後みんなが入ったファミレスで、席を立っていたためぐみが戻ってくると他の娘が訊いた。

「うっん。乃亜」

「ああ、彼女、平気だった？」

由美がそう言って、目をパチパチと瞬きさせた。

「乃亜って、かなりの訳ありだね」

江梨子がそう言って、ドリンクのストローを啜えると

「メグは、乃亜と仲いいよね」

「そうでもない。今はね……」

めぐみはそう言って、自分のグラスから伸びたストローを啜える。由美はそんな彼女に

「中学一緒だったんでしょ？」

「一応ね。でも、クラス違ってたし」

めぐみは、小学校の時は親友同然だった事は、あえて言わなかった。

「彼女の周りって、不幸が続くよね」

江梨子が、ニヤ付いた顔でそう言つと

「そんな言い方止めなよ」

めぐみはその話題が膨らむ事を制して、何となく心配事を引きずった顔で、窓の外を見つめた。

めぐみは何時も一緒だった乃亜の事を思い出していた。中学に入つてクラスが別々になった時は、とても寂しかった。

それなりに仲の良い友達も出来たが、乃亜ほど気の合う仲間は現れなかった。

それでも、現状の楽しい仲間には困まれながら、次第に乃亜の事は

考えなくなっていた。

しかし、乃亜の母親が出て行った事は、知っていた。何故か、何処かで聞いたのだ。

その時も、本当は彼女に言葉をかけてあげたかった。

忘れていた乃亜との友情が、めぐみの中に沸き起こる気がした。でも、その時はもう、乃亜の傍には何時もナツミがいた。

高校へ入学してから、乃亜が同じ学校だったとめぐみは知った。

その時改めて気が付いたが、乃亜は以前の彼女ではないような気がした。何処か陰りがあって、久しく話していないめぐみには、声をかけ難い雰囲気になっていた。

自分の知らない間に、かつての親友は遠い存在になったのだと思っ

た。全く会話の無いまま二年を過ごした。

縁がないのか、めぐみと乃亜のクラスは何時も二つ以上離れていた為、ほとんど接点が無かったのだ。

それでもめぐみは時々乃亜の後姿を見ていた。

あまりみんなに心を開かなくなった乃亜が、唯一の親友瀬戸奈津美と楽しそうにじゃれ合う後姿を……

【第22話】

「乃亜」

翌日の放課後、乃亜が駐輪場から自転車を出していると、めぐみが声をかけて来た。何となくそのまま、彼女と一緒に自転車を並べて校門を出る。

「お母さんと一緒に住まないの？」

めぐみは、気を使って教室では話さない話題を出してきた。

少し前の乃亜だったら、ナツミ意外にはこんな話はしなかっただろう。「どうでもいいでしょ」そんな言葉を返していたかもしれない。

「うん。もう一緒には暮らせないよ」

乃亜の口からは、素直にそんな言葉が出た。

「中学の時だよ、出て行ったの」

乃亜は、ずっとクラスが違っていた彼女がそんな事を知っている事に、少し驚いた顔を見せた。

「ごめん。そんな話、中学の時に聞いた気がして」

目を伏せるめぐみに、乃亜は笑顔を見せて

「メグ、変わらないね。昔と」

乃亜はめぐみを見ずに、空を仰いで言った。

彼女の言葉に今度はめぐみが驚いた顔を見せた。

乃亜は、少し尖った顎を突き出して上を向いたまま

「昔も、よくあたしがチョット不機嫌な顔をする、メグったら直ぐにごめんねって言ったよね」

めぐみは、乃亜が自分と親友だった頃、何時も一緒に遊んだ小学生の頃の事を覚えているんだと判って嬉しかった。

最近は小学生の頃の記憶を無くしている高校生も少なくないと言う。楽しい事が少ないからなのか、心に残る出来事が少ない為なのか。それとも、心に残すと言う行為を知らないのかもしれない。

「ナツミの四十九日、乃亜は呼ばれてるんでしょ」

「うん……」

「あたしも行きたいなあ」

めぐみは、ナツミと一緒にのクラスじゃなかったなので、焼香にも行っていない。

ちょうど、信号待ちの横断歩道の手前で二人は止まった。

「乃亜の親友に、お線香くらい上げないと……」

「じゃあ、来なよ」

「大丈夫かな」

「大丈夫だよ」

二人は横断歩道を渡ると、心地よい風に吹かれながら横並びのまま自転車を走らせた。

乃亜がアパートへ帰ると、コウが外で待っていた。

「あれ？ 学校は？」

「なんか、職員会議で短縮授業だったから」

コウは、コーラのミニペットを片手に立ち上がった。

「メールでもくれれば良かったのに」

「驚かせようと思ってさ。たまにはいいだろ」

「うん。驚いた」

乃亜は、そう言っただけで笑った。

最近、コウと一緒にいると、麻希の言葉が頭を過る。

亜矢乃に惹かれていたコウの事を、彼女から聞いた乃亜は、自分が亜矢乃の代用としてコウに抱かれている気がしてならなかった。

亜矢乃と自分は同一人物だろう。しかし、やっぱり乃亜にとって亜矢乃は同じ身体を持った他人なのだ。

もう一人の自分に、自分自身が嫉妬しているのだろうか。何とも奇妙な気持ちだった。

それでも、もう家族のいない乃亜にとって、自分を抱きしめてくれるコウの存在は不可欠だった。

左胸に刻まれたタトゥーを知っているコウだけが、彼女に温もりを分けてくれるような気がしたから。

しかし、確かめなければ…… 手遅れにならないうちに。

彼の温もりが自分から離れてしまう恐怖に脅えないうちに。今ならまだ間に合う。

自分の周りで起こる数々の不幸な出来事。今ならその一つとして埋もれさせて、一緒に忘れてしまう事も出来るだろう。

どれが何の悲しみか判らなくなつて、心の奥に永遠に仕舞い込む事が出来るに違いない。

乃亜は自分の横で眠ってしまったコウの顔を眺めながら、リモコンを使ってテレビの電源を入れた。

あまり面白くも無い深夜のバラエティー番組が、空々しく笑いを誘っていたが、乃亜はただ漠然と画面の明かりを眺めているだけだった。

【第23話】

週末、乃亜はバイトが終わると一端家に戻り、鏡台の引き出しを開けた。

亜矢乃が使っているファンデーションを薄く塗って、瞼にアイシヤドーを乗せる。

アイラインを濃い目に引き直して、マスカラをたっぷりと二度塗りする。何だか瞬きが重くなった気がするのは気のせいか……

ローズピンクのグロスを唇に引いて、着ている洋服を脱いだ。

赤いチェックのミニスカートを履いて、鉾の着いたギャリソンの太いベルトを腰に巻く。いつの間にか買ったのかまったく記憶に無い革のライダーズジャケットを羽織り、家を出る。

再び所沢のBoscoに着いた乃亜は、勢いよくドアを開けた。

客の視線がくすぐったいくらいに全身を撫で回す。

髪を揺らして闊歩しながら、店内の様子を見定めると、奥のテーブルにコウの姿が見えた。

「よう、来たんだね。最近見かけないから」

コウはバンドメンバーらしい仲間と一緒にいたが、その連中は気を利かせたのかカウンター席へと移って行った。

「何だか、久しぶりな感じだね」

彼はそういいながら、タバコに火をつけた。

コウは完全に、乃亜を亜矢乃だと思っている。

そう…… 乃亜はコウの気持ちを確かめる為に亜矢乃の姿でここへ来たのだ。

自分は本当にただの亜矢乃の代用に過ぎないのか…… 彼に、自分の身体をさらけ出した事は間違いだっただのか。結局男は身体だけが目当てなのだろうか……

乃亜は出来るだけ明るく笑って見せた。あの写真で見た亜矢乃の笑顔のように。

「最近彼女が出来たんだって？」

「誰に聞いたんだい？そんな事」

「いいじゃん、誰だって」

乃亜は怪しい笑みを作って見せた。ローズピンクの唇は店の照明に照らされて、淡くパールを浮き立たせる。

相変わらずコウは気付いてはいない。完全に亜矢乃と話しているのだ。そして、乃亜との約束通り、彼女とは別の人間として接し
てくれている。

その姿が、乃亜には少しだけ心苦しかった。

「今日は、麻希は？」

「ああ、明日模試があるらしい」

麻希はああ見えて、進学校に通っているのだ。校風が自由を尊重
しているので、勉強さえしっかりやれば身なりは関係ないらしい。

「そう……」

乃亜は少し安心した。もし麻希が来たら、メイクをしても自
分が乃亜だと見破られそうな気がしていたのだ。

「彼女はどんな娘？」

乃亜はマティーニを口にしながら尋ねた。

「どうして、そんな事訊くの？」

「何となく、知りたいじゃない」

コウは、少しだけ目を伏せると

「悲しく、綺麗な目をした娘さ。キミみたいに」

「あたしが？」

「彼女もそうだけど、何か悲しい過去を持っているんじゃないかな
それが瞳のずっと奥に映るような感じ…… かな」

コウはそう言って微笑んだ。

コウは乃亜に対して、どうして高校生なのに一人暮らしなのか、
両親はどうしたのか訊いては来なかった。だから乃亜は、本当に自
分に興味があるのか無いのか、ただ亜矢乃の事が知りたいのか。ま
ったく検討がつかなかった。

自分を抱いている時にも、亜矢乃の事を考えているんじゃないか…… そんな不安が過っていた。

しかし、コウは思いの外自分を見ていた。瞳の奥から乃亜の悲しい過去を見つけてくれていた。

誰も気づいてはくれない心の悲しみは、いつの間にか彼女の瞳に映し出されて、それを彼はちゃんと見てくれていた。

「あたしが、今夜付き合うつていったら…… どうする？」

コウは手元のビールを飲み干すと、涼しげな笑みを浮かべて嬉しいけど、遠慮しておくよ」

乃亜は正直コウの言葉が嬉しかった。

彼の瞳にはやっぱり、少しシャイな精霊が宿っていた。それは、虹彩の奥から優しく乃亜に微笑みかけるのだ。

目の奥が熱くなって、涙が込み上げてきたが、それを見せるわけにはいかない。

「そう…… じゃあ、別の誰かを誘おうかな」

乃亜は彼から視線をそらすと、そう言って立ち上がった。

「止めておけよ」

コウは乃亜の手を掴むと、真剣な顔でそう言った。

「冗談よ。今日はもう帰る。じゃあね」

「ああ」

コウは座ったまま足を組みなおして、右手を軽く上げて出口へ向かう彼女を見送った。

乃亜は彼の優しい確かな視線を背中で感じながら、出口のドアを抜けた。

【第24話】

まだ終電に間に合いそうな時間だった。商店街にはほとんど人影は無く、路上の片隅でギターを弾く青年の姿だけが街路灯に照らされて、なんだか物寂しく映った。

駅のロータリーが見えると、終電に乗るための人影が意外と多いことに気がついた。

飲んで帰る連中が、この時間になだれ込んでいるのだろう。

乃亜は何だか判らない涙が、ポロポロと頬を伝うのを感じていた。悲しい訳でも無いのに、次から次へと瞳から雫が零れ落ちる。

自分はコウを疑っていた。亜矢乃と同じこの身体が目当てなのではないかとか、二人きりの時に彼の目の前で亜矢乃になるのを待っているのではないかとか。

そんな醜い考えしか浮かばない自分の心が嫌だった。

あの精霊が宿るような綺麗な瞳は、もっと純粋に自分を見ていてくれたのだ。

どうして、自分も純粋に彼を見る事が出来ないのか。初めて出会った時は、純粹にあの瞳に心が揺らいだではないか。

立ち止まって涙を拭いたかったが、今は駅へたどり着くのが先決だと思った。

コウと身体の関係になつてから、次第に頭痛はしなくなっていた。今は記憶の欠損も自分では感じられない。

「最近亜矢乃が現れなくなつたよ」この前会った時、コウもそう言っていた。今日聞いた彼の言葉からしてもそれは本当なのだろう。

亜矢乃は何処へ行ってしまったのか。

自分の心がコウによって満たされている今、亜矢乃が現れる必要が無いと言う事なのかもしれない。

その時、急に背後から誰かが乃亜の腕を掴んだと思うと、身体ごと細い路地へ引き込まれた。

乃亜は、あまりの驚きと恐怖でとっさに声が出なかった。小柄な乃亜は、あっという間に暗い路地の中ごろまで引つ張られてしまった。

「なんだよ、コウにばかり女が寄っていったよ」

さつきBoscoの中で見かけた気がする顔が、暗闇に注ぐ微かな光の中で狂気に満ちた笑みを浮かべていた。

乃亜は暗い路地に倒されて身体を強く押さえ込まれ、身動きが取れなかった。

いきなり口にバンダナを押し込まれて、声が声にならない。

バタバタと身体を動かしてみるが、馬乗りになった男の身体はビクともせず、自分の体力を無駄に消耗するだけだった。

男の大きな手は、片一方だけで彼女の両手を掴む事が出来た。頭の上で両手を掴まれた乃亜は、全く自由が利かなかった。

男は酒臭い息を荒げて、空いたもう一方の手は当然のように乃亜の身体を這い回る。

乃亜はもがきながら、これは現実なのだろうかと言う疑問さえも沸き起こった。何処か現実味の無いこの状況は、彼女の思考を振るわせた。

一時、息をつく為に乃亜の抵抗が止まると、両手を掴んでいる男の手の力が緩んだ。彼女の身体を触るのに夢中なのだ。相変わらず酒臭い息が、乃亜に降りかかる。

その隙を突いて、乃亜は左手をそこから抜き取る事が出来た。何故か着ていたライダーズジャケットのポケットに手を入れた。

自分でも、何故とつさにそうしたのか分からない。

ポケットの中に入れた手が、冷たく硬いモノに触れた。彼女は無意識にそれを握り締めた。

男は慌てて、ポケットに入れた乃亜の手を再び掴もうとする。

携帯電話でも取り出そうとしていると思っただろう。

その時、乃亜のこめかみの、右から左に細くて長い針が貫いたよ
うな、激しい痛みが一瞬走った。歯科治療で神経を触られた時のよ

うな、全身に冷たい電気が走って身体が跳ね上がるような痛みだった。

乃亜自身は、その一瞬の痛み思わず目を閉じた。そのはずだった。

しかし、その一瞬閉じた目を開けると、乃亜に押し掛かっていた男は急に立ち上がってよろめきながら後ろへたじろいだ。

乃亜は何が何だか分からなかった。

男の重みが身体から無くなった為、彼女は両手を地面に着けて上体を起こしながら目の前の男を見ていた。

さつきポケットの中で感じた冷たいモノ。

確かに握ったはずなのに彼女の手は空だった。

暗がりの中で微かに見える男の腹部にはナイフが呑み込まれていて、シャツが黒々と染まってゆく。

いったい何が起こったのか……

男は声も出さずに、その場に崩れるように倒れこんだ。

その光景は、何だか判らないものに追い立てられているようで、乃亜にはこの上なく恐ろしかった。

気がつくとも彼女は細い路地を抜けて走り出していた。駅まではあつという間だった。

急いで切符を買おうとするが、手が震えてなかなか硬貨が入らない。

とにかく自販機にお金を入れることに集中した。

自動改札を抜ける時、終電の発車のベルが鳴っていた。

一番近い車両のドアに滑り込む事が出来た乃亜は、肩で息をしながらか閉まったドアにそのままもたれかかった。

鼻孔に付着しているのか、衣服に付着したのか、彼女はまだあの男の酒臭い強烈な臭いを振り払う事が出来ないでいた。

【第25話】

いったい…… いったい、何が起きたのだろう。

あの男は死んだのだろうか。あたしが刺したのだろうか。

どうして、ポケットの中に飛び出しナイフなんか……

乃亜は、肩で大きく息をしながら自分のポケットに手を当てて考えた。

でも、あたしが目を閉じたのは一瞬だった。ほんの一瞬だったはず……

違うのか？ 自分が一瞬だと思っているだけ？

亜矢乃とはいったいどんな女なのだろう…… あの一瞬こめかみを貫くような痛み。あの一瞬の記憶が無い。

あの一瞬、あたしは亜矢乃になったのだろうか。そして、あの男を刺したのだろうか……

一人息を切らす乃亜に、同じ車両に乗り合わせた周囲の視線が集中する。

彼女は慌てて平静を装う為に、静かに深く息を吸って、そして静かに吐いた。それでも心臓の鼓動の高鳴りは収まらなかった。

彼女は、周囲の人の視線を避ける為に、身体を返して窓の外を向いた。

窓に映る自分の顔がとても頼りなく、疲労に満ちていた。その顔の奥に潜むもう一人の自分が、一瞬ガラスの奥に見えたような気がした。

亜矢乃はそんなに凶暴なの？ いや、違う……

あれは防衛本能だ。純粹に自分を守るために、亜矢乃が行った行為。

それは、あたし自身が望んだ行為かもしれない。

乃亜の脳裏にふと恐ろしい事が過った。

防衛本能……あたしの望み……

父から逃れたい一心も……

あの時………朝起きた時、父親は既に死んでいた。

腹部には刺し傷があつて、玄関の鍵が開いていた事から、警察では物取りの犯行か怨恨かと言つていたが、状況証拠も無く捜査は難航してあまり進んでいないらしい。

あまり考えた事が無かつた。あの男がこの世から消え去つた事実だけがあれば、それでよかつた。

乃亜にとって、父親が何故死んだかなんてどうでもよかつたのだ。父から逃れられたのも、亜矢乃のおかげ？ 亜矢乃は父を……まさか……

そんな痕跡は一見して何処にも無かつた。凶器だつて見つからない。

しかし、さっきの男は……あの男をナイフで刺したのはどう考へても自分だつた。

他には人影は無く、どんなに都合よく考えてもそれ以外に在り得ない。

乃亜は高鳴る鼓動が何時までも収まらないまま、人間駅に着いた。

乃亜が終電に乗り込んで間もない頃、所沢のショッピングロードにある雑居ビルの周りは密かな慌しさに囲まれていた。それはBoscoの入っているビルだつた。

駅と反対側に抜ける車道からは、ゆつくりと数台のパトカーが赤色灯を点けずに静かに入り込んで来ていた。

それでも、少し離れた細い路地の暗がりには男が倒れている事など、誰も気づきはしなかつた。

Boscoのテーブルで、コウは再び仲間に囲まれて酒のグラスを片手にタバコを吹かしていた。

「なんだよ、亜矢乃誘つてなかつたか」

バンド仲間がコウに近づいて言った。

「返しちまって、もったいねえ」

カウンターにいたもう一人も、コウのいる席に戻ってきた。

「あいつは、そういう娘じゃないんだよ」

コウは呟くようにそう言っつて、気だるそうにグラスを傾けた。

もう一方の手に挟んだタバコの煙が、天井から注ぐゆるいライトに照らされて、ゆらゆらと細く立ち昇っていた。

終電が終わった後でも、週末のBoscoはお客の引く気配が無い。他の店と違って、未成年にも酒を与えるこの店は、高校生、専門学校生など、週末に行く当てのない少年、少女たちの貯まり場的な存在として有名なのだ。

中にはいい気になって、学校の制服で入店する若者もいるが、さすがにそれは許されない。あくまでも、未成年では無い素振りをしなければ、ここに入る事は出来ないのだ。

店主であるリーゼントのバーテンの男は、どうせ飲むんだから、無茶な事をさせないようにこの店で飲ませてやった方がいい。そう思っていた。

それは、自分が学生だった頃を振り返つての事なのだろう。

最低限のモラルも、少年たちはここで教えられる。もし、他の客といざこざを起こせば、二度と店には入れない事もみんなが知っているのだ。

確かに法律に触れる行為には変わりないが、駅のロータリーでたむろしているよりも、ここに来れば仲間にも会えるし、酒とタバコ以上の犯罪に走る事もない。それは確かな事だった。

オールディーズの曲が流れるまったりとした時間の中、入り口の重いドアが勢いよく開いた。

空間を切り裂くような、このひと時を瓦解する音だった。

只ならぬ気配に、店内の若者は一斉に視線を向けた。

背広を着た男が三人、なだれ込むように入つて来たかと思うと

「警察です。みんな動かないで。その場において下さい」

その声は妙に穏やかで、イベントの係員のような口調だった。

誰もが動揺した顔を隠す事は出来なかった。誰かがトイレに逃げ込もうとした。

「ほらそこ！ 動くなと言っただろう」

さっきの穏やかな声とは裏腹な、迫力のある怒鳴り声が店内に響いた。

「とりあえず音楽止めてくれる」

後ろにいた若い私服警官が、カウンターにいるバーテンに向かって言った。茶髪の若い店員は慌てるようにオーディオの電源を落した。

途端に店内には静寂が広がって、何処か冗談のようにも見えた光景は、瞬く間に緊張した空気に包まれた。

「店主はあなただよ」

リーゼントのバーテンに向かって、最初に言葉を発した背広の男は言った。やはり、穏やかな口調で、それが余計にこの空間の緊張を高めていた。

その時、再びドアが開いて、5人の警官が入って来た。背広の上に全く似合わない、背中にPOLICEと入った紺色のジャンパーを着ていた。

「ここで、未成年に飲酒をさせていると言う通報があった」

背広の男は、続けて言った。

成人のお客はそのまま店を出されて、残った未成年者は男女含めて店内に七人いた。

もちろん、その中には真鍋コウの姿もある。

しくじった…… ここは安全だとみんなが思っていた。

しかし、法を犯している事に安全などないのだ。

ここに入入りする事は何時しか当たり前になって、何処か合法のような錯覚さえしていたのだ。

彼は、来年受ける大学の事など、これからの自分の未来を一瞬で

考えていた。

今夜、あのまま亜矢乃と店を出ればよかったのか。そんな事をぼんやりと思いながら、額に流れる冷たい汗をそっと拭いた。

【第26話】

乃亜は点々と街路灯の連なる夜道を、ひとり自転車を走らせていた。

終電から降りる人の波に流されるようにして入間駅の階段を下りて、見慣れたロータリーに佇む岩の塊のような公衆トイレを見ると、ホッと息が漏れてきた。

それでも何時もの緩い坂道がやたらと長く感じて、ペダルを踏んでも踏んでも自転車が前に進んでいないような気がした。

ふと横を見ると、煌々と明かりを燈すファミレスが在る。ナツミと最後に来て一緒にご飯を食べて、一緒に笑った場所。

乃亜は、何だかそれが、もう何年も前の出来事のような気がした。ようやく市役所の前まで来た時、最近はめつきり見なくなつた暴走族のバイクが、けたたましい爆音と共に、交差した国道を横切るのが見えた。

アパートへたどり着いた乃亜は、部屋へ入るとホッと息をつくと共に、再び身体が震えた。脱いだライダーズジャケットを放り投げると、そのまま着ていた服を全て脱ぎ棄てシャワーを浴びた。

あの男の酒臭い臭いが未だに感じられて、乃亜は全身をくま無く洗い流した。

パジャマを着ると、頭にタオルを巻いたまま布団に潜り込んだ。何だか身体がだるくて、頭の中も混乱して正常な思考が働かない。いったい今夜起きた出来事は、本当に現実なのだろうか……

何も考えたくなくて、布団をすっぽりと被つたまま震える身体を押さえることが出来なかった。

翌朝、乃亜は普段どおりに目を覚ました。布団から起き上がる時、

頭に巻いてあったタオルがスルリと落ちて、昨晚髪の毛を乾かさなかつた事を思い出した。

肩に着く髪がぐしゃぐしゃのまま、しかも半乾きだった。溜息混じりで再び髪の毛を濡らして、ドライヤーできちんと乾かす。

さつきスイッチを入れたコーヒーマーカから香ばしい香りが漂い始めた。

ふと、昨晚の出来事を思い出して、重い現実が彼女に押し掛かった。

今さつきまで忘れていた。普通に穏やかな日曜の朝だった。

こうして、何時もは何もかも忘れて過ごしていたのだろうか……どうすれば判らないほどに重要で、殺人事件に繋がるかもしれない出来事を学校の宿題のように簡単に忘れるなんて……

今の乃亜には、昨晚の出来事よりも今さつきまでその事実をすっかり忘れている自分にショックを受けた。

あんな事があつた翌日に、普通に起きて、普通にコーヒーを入れていた。

乃亜は、途端にコウの声が聞きたくて電話をかけた。しかし、彼の電話は電源が切られていて繋がらなかった。

乃亜は息をついて電話を置くと、コーヒーをカップに注いだ。何故だろう。

昨晚はかなり動揺していたはずなのに、一晩経つたらたいして何も感じない。あの男は自分を襲つて来た。正当防衛だ。アイツが悪いんだ。自業自得だわ。別に、あんな男がどうなるうと知つた事か。そんな言葉が次々と浮かんで、彼女の心を思いの他平常に保とうとする。

もう一人の人格が自分にいるらしいという事は、コウや麻希に聞いて知っていたし写真も見せてもらった。

そこにいたのは、紛れも無く自分自身だった。

それでも乃亜には、別の人格でいる記憶がない。だから、何処か

架空めいた事として捉えていたのだ。

しかし、昨日のあの一瞬の出来事が、もう一人の人格を彼女に実感させたのだ。

一瞬目を閉じた時間は、自分が思っている以上に長かったに違いない。

昨夜は身体の震えが止まらなかった。布団の中で丸くなってその恐怖に耐えていた。

それなのに、一夜明けたらその動揺は何処かへ飛んで行ってしまった。

昨夜の出来事を現実と受け止める自分が、何処か冷静で投げやりだった。

夕方からのバイトも普通にこなして、電話の繋がらないコウの事だけが、何となく気がかりだった。

今まで電話が繋がらなかった事は殆ど無い。圏外だったとしても、しばらくしてかければ繋がるのが普通だった。

今日1日で何度もリダイヤルして、それでも一向に彼の電話には繋がらなかった。

バイトが終わって店を出た時、そういえば、コウの家はこの近くなのだと言う事を思い出して、途端に彼の事が恋しくなった。

帰る道とは反対方向に伸びる住宅街を、暗闇の中で見つめた。

静まり返った暗がりには灯る街路灯が何処までも続いて、緩くカーブした先に消えていた。

いきなり携帯電話が鳴って、乃亜はビクリと身体を震わせた。電話は麻希からだった。

「あ、乃亜。コウの事聞いた？」

「知らない。コウがどうかしたの？」

コウの名前を聞いた途端に、乃亜の心臓が一瞬跳ね上がった気がした。

「昨日さあ、BOSCOにガサ入れあったんだって」
「うそっ」

乃亜はとっさにそう返した。

昨日の夜は自分もそこに行ったのだ。自分が帰った後の事だろうか。コウも捕まってしまったのだろうか。

一瞬で彼女の思考がぐるぐると頭の中で走り回る。

「かなり遅い時間だったらしいよ。コウも含めてみんな補導されたっさ」

やっぱり…… 乃亜は今一瞬考えた悪い予測が当たった事に落胆した。

それを聞いて、コウの電話が繋がらない理由がはつきりした。

「乃亜、今何処？」

「バイト終わったところ」

「じゃあ、コウん家の近くにいるんだね」

「うん……」

「電話繋がらないし、たぶん家に行っても会えないと思うよ」

「うん。判ってる」

「そんなに心配しなくて大丈夫だよ。逆に、Boscoの店長の方が心配」

乃亜は、麻希にそう言われて、初めてあの店の事を考えた。

「しばらくは営業停止だね」

麻希は少しだけ冷たく笑ったと思うと「コウは停学かもね」

「停学？」

「でも、その程度だろうから、大丈夫だよ」

麻希は何だか軽い口調でそう言った。

それが、乃亜を励ます為にあえてそうしているのか、彼女のもととの性格なのかは乃亜には判らなかつた。だから、少しだけイラついた。

乃亜は、電話を切った後、コウの家に行ってみようかとも思ったが、やっぱり止めておく事にした。

今自分が行ったからって、どうなるものでもない。それに麻希が言った通り、会えはしないだろう。警察沙汰になったのだから、親が放っておくとは思えない。

乃亜はゆっくりと自転車に跨ると、国道の緩い上り坂を自分のアパートの在る豊岡方面に向かって走り出した。

【最終話】

アパートの前まで来ると、通りの暗がりにはスーツを着た男が立っているのが見えた。

手前側に一人、そして敷地の向こう側にもう一人。

一人はグレー、もう一人は茶色っぽいスーツだが、ほの暗い夜道で顔までは見えなかった。

こんな時間に何をしているのだろう。ただのサラリーマンとは雰囲気が違う。

しかし、そんな事を考えるのが、今は鬱陶しい。

何も考えたくない頭の中で、唯一過るのはコウの事だけ。

彼女がアパートの階段を足早に駆け上がると、部屋の前にもスーツを着た男が二人立っていた。こちらは通路の明かりで顔がはっきりと見える。

一人は四十代くらいで、髪を七・三に分けて濃いグレーのスーツを着ていた。いかにも神経質そうに、眉根をあげて彼女を見つめた。もう一人は白髪混じりの角刈りで、かなり年がいつている。五代半ばは過ぎていそうで、濃い色のスーツの上にベージュのステンカラーコートを着ていた。

乃亜が思わず足を止めると、さっき通りにいた二人が階段を上って来て彼女の後ろに立った。

「な、なんですか？」

乃亜は警戒心を露に言った。

「由衣島乃亜さんですね？ いやあ、怪しい者ではありません」

一番年配の角刈りの男は、静かにそう言って身分証明書をかざした。

黒革の証明書入れには、金色のバッヂが光っていた。

「警察……ですか？」

乃亜は、背中にゾクゾクと冷たいものが這い回る気がした。

さつきまで頭の隅にあつた、真鍋コウは何処かへ飛んで行った。昨夜の事がもう知られたのだろうか。警察の捜査能力はそんなに優れているのだろうか……

あの男はやっぱり死んでしまったのだろうか。乃亜の頭の中でぐるぐると思考がめぐり、足の底がふわふわして床を踏んでいる感触が無くなっていった。

しかし、警察が来たのは昨夜の事ではなかった。

「キミは今、一人で暮らしているんだね」

年配の刑事の目は穏やかだった。しかしその奥の眼光は、乃亜の事を何でも知っている、何でもお見通しという目だった。

内定捜査が影で進んでいたのだろう。

それは昨晚、電車の中でほんの一瞬だけ乃亜が考えた恐ろしい事実に関わりのある事だった。

しかもその恐ろしい現実には、一件だけでは無かった。

「お父さんが亡くなった事件と、一ヶ月前の関町での殺人事件について少し聞きたい事があるので、任意同行していただけますか」

年配の刑事が、優しい口調で話すのを、乃亜は瞬きもせずに見てていた。

彼女は若い刑事に促されてアパートの階段を下りると、何処に隠れていたのか、何時の間にか現れた黒塗りの覆面パトカーの後部座席に静かに乗り込んだ。

何処かの応接室のような匂いのする車内で、彼女は身近な人たちを思い起こしていた。

ほんのひと時だったけど、心の支えになった真鍋コウ。彼は今どうしているのか。しばらくは、好きなバンドもさせてもらえない事だろう。

そして再びいい関係になりそうだった相田めぐみ。一度でも再び逢えた母親。

でも、この先何がなくとも、全てはうまくいかないような気がしていた。

全ては夢のひと時なのだ。

途端に、しばらく忘れていた園部や安田の事を思い出した。

彼らは、今頃どうしているだろう。どうせ、別の女性を買ってヨロシクやっっているに違いない。

きっと、彼らにとって自分の代わりは幾らでもいるのだ。

覆面パトカーは、タクシーのように静かに闇の中を走っていた。

まるで、何処か知らない世界に届けられるような気がした。

このまま幻想の世界へ迷い込んで、二度と現実の世界へは戻って来なければならないのに。この世界から、身も心も消えてしまえばいいのに。

そこにはきつとナツミもいて、あの人懐っこいのん気な笑顔で微笑んでくれる。

この先の事など、もうどうでもよかった。

やはり自分には普通の暮らしは出来ないのだ。

得体の知れない何か、自分の平穏な暮らしの日々を奪ってゆくのだ。

それはやはり、父親の残した呪縛なのかもしれない。

* * * *

明け方の少し冷たい空気が漂う中で、少女は玄関のドアを開けた。靴を脱いでいると、物音に気づいた男がリビングから姿を現して玄関までやって来た。

「乃亜、こんな時間まで何処へ行ってた」

「うるせえんだよ」

「なんだ、その化粧は。罰を与えるから来なさい」

「触んな、ジジイ。あたしは、乃亜じゃない」

「何言ってるんだ、さあ、こっちへ来い」

男の大きな黒い手が少女の細い腕を掴んで、無理やりリビングへ引つ張っていった。もう片方の手には、使い込んだ赤い縄ひもを持っている。

「離せつ、ジジイ」

「そんな、反抗的な口をきいても無駄だ。判ってるだろう」

男は力任せに、暴れる少女の身体を安物のソファに押し倒した。しかしその時、男は自分の腹部にやたらと熱いものを感じた。

何だか判らない、内臓が焼けるような熱さだった。

男は思わず起き上がって自分の腹に手を当てると、そこには在るはずの無い大きな突起物が突き出ていた。触った手には、ぬるりとした生暖かい感触。

視線を落すと、みるみるうちに寝巻きが赤黒く染まってゆく。

それを見た瞬間、男の顔が苦痛に歪んだ。

ナイフを刺した瞬間、手首をひねる事も忘れていない。そうする事で出血が倍増するし、キズの修復も困難になる事を彼女は知っていた。

「あたしは乃亜じゃないって言ってるだろ」

少女はそう言ってソファから起き上がると、乱れた髪をかき上げながら

「あたしは、亜矢乃だよ」

亜矢乃は冷ややかな笑みを浮かべると、悶絶して床に倒れこんだ男を見下ろした。

「肝臓を刺したから、あんたはもう助からないよ。これで乃亜も救われるってもんだろ」

彼女は芋虫のように転がる男の背中に、自分の片足を乗せて床に押し付けた。

* * * *

亜矢乃はあたしの望みを叶えてくれる、あたし自身のもう一人の人格。

亜矢乃はきつと、左胸のカラスアゲハが、絶望と快楽と憎悪の狭間で呼び起こしたもう一人の自分なのだ。

あたしのこころの中の狂気に満ちた切なさ、二人分だった。

父親を殺し、そしてナツミの彼氏を殺したのも亜矢乃だった……

それでも乃亜は後悔したりない。

だってそれは、結衣島乃亜自身の、確かな望みだったのだから。

亜矢乃は乃亜の純粹な願いを叶える、鏡の中の自分なのだから。

彼女が車窓から見上げた青白い三日月は、氷のように冷たい笑みを浮かべながら、静かに流れる雲の波間を漂っていた。

【最終話】（後書き）

Dual Personal タイトルの語源になったのは、もちろん多重人格という言葉です。しかし、本当は読まなければ解らないようにしたかったので、タイトルもあらずじにも多重人格の事は記入したくありませんでした。でも、それだと読者が増えないよ
うな気がして… 思いの他たくさんの方に読んでいただき、大変感
謝いたします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4117b/>

DUAL

2008年11月7日08時00分発行